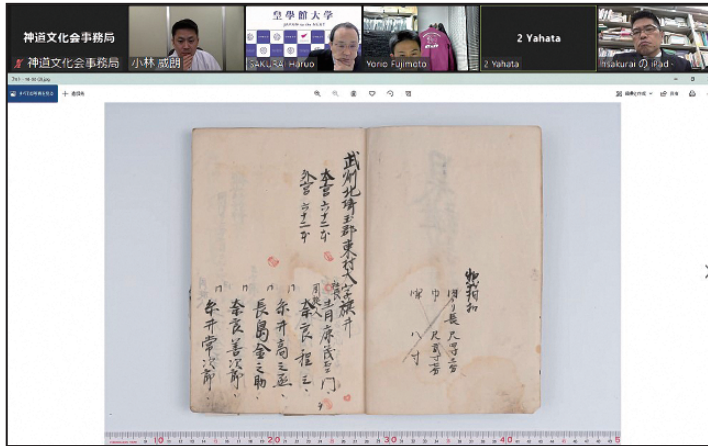


〔座談会〕

伊勢信仰と神道文化

—神宮御改正から 150 年を迎えて—

令和 4 年 1 月 25 日 (火) 午後 6 時～9 時 [リモート (Zoom) 形式による開催]



〔出席者〕
櫻井治男

(さくらい・はるお) 皇學館大学名誉教授、博士 (宗教学)。皇學館大学大学院修士課程修了。文学部教授、社会福祉学部教授、同学部部長などを経て、現在、同大学特別招聘教授。本会理事も務める。著書に『蘇るムラの神々』『地域神社の宗教学』『神道の多面的価値』『日本人と神様』など多数。

八幡崇経 (やはた・たかつね) 呼子八幡神社宮司。愛知学院大学大学院修士課程修了。神宮へ奉職後、平成十三年から現職。共編著に『神宮神事考証拾遺』、論文に『近代の神宮式年遷宮と御巫清直』(『明治聖徳記念学会紀要』復刊十八号)、『御装束神宝の奉獻について—嘉保二年内宮遷宮を中心として』(『皇學館大学神道研究所紀要』十五輯) など。
窪寺恭秀 (くぼでら・やすひで) 神宮主事。皇學館大学大学院博士課程満期退学後、神宮へ奉職。論文に『中世後期に於ける神宮御師の機能と展開について』(『皇學館大学神道研究所紀要』二十一輯)、『中世後期に於ける内宮祠官の御師的活動と御祈禱について』(『伊勢郷土史草』三十八号) など。

小林威朗 (こばやし・たけろう) 久伊豆神社禰宜、國學院大学兼任講師。博士 (神道学)。同志社大学卒業後、國學院大学大学院修士後期課程修了。著書に『平田国学の靈魂観』、論文に『明治前期の神職とその活動』(阪本是丸編『近代の神道と社会』) など。

藤本頼生 (ふじもと・よりお) 國學院大学神道文化学部教授、一般財団法人神道文化会理事、博士 (神道学)。國學院大学大学院修士後期課程修了。著書に『神道と社会事業の近代史』(『東京大神宮ものがたり』明治維新と天皇・神社) など。

〔オブザーバー参加〕
岡市仁志 (おかいち・ひとし) 本会事務局長・神社本庁総合研究所研究祭務課長。

藤本 本日の座談会の司会を務めます國學院大學の藤本です。どうぞ宜しくお願い致します。それでは、まず本会を代表して、岡市事務局長から、一言ご挨拶をお願い致します。

岡市 本来ですと、皆様方にお集まり戴いて座談会を開催致したいところですが、一昨年来からの新型コロナウイルスの感染拡大が止まらず、現状、オミクロン株による第六波の真っ只中という状況を鑑みて、このような形態で実施致します。

今回は「伊勢信仰と神道文化」という座談会です。本年は御承知の通り、神宮大麻の全国頒布から百五十年という節目の年でもございます。明治維新から先の大戦の終戦までがおおよそ七十七年、また終戦から本年までが七十七年です。終戦を起点とすると近代から現代までの年月が、同じとなるのが本年でございまして、その点でもいわば記念すべき年にあたります。その節目の年にあたり、このようなテーマでの座談会は、非常に意味があるのではないかと考えております。本日は限られた時間ではありますが、どうぞ有意義な座談会となればと有難く存じます。宜しくお願い致します。

藤本 岡市事務局長、どうも有難うございました。それは、開催にあたり、司会の私の方から本座談会の趣旨を少し紹介致したいと存じます。

先程、岡市事務局長の方からも紹介がありましたので、今回

の座談会は「伊勢信仰と神道文化」です。副題を「神宮御改正から百五十年を迎えて」と致しております。昨年、令和三年は明治政府によって神宮の御改正がなされて、中世から明治維新まで、全国津々浦々のお伊勢参りを支えてきた伊勢の御師の制度が廃止されてから百五十年という年でした。

そして本年、令和四年は神宮大麻の全国頒布の開始から百五十年という節目の年に当たるということで、神宮大麻が全国に行き渡り、新年の初参宮が始まる一月のこの時期に「伊勢信仰と神道文化」というタイトルで『神道文化』掲載の座談会を開催したいと考えておりました。

中世以降、伊勢信仰を支えてきた要素の一つが御師であったのはいうまでもありません。この御師の発生とその活動の展開を窺うこと、また、「おかげまいり」とも称される伊勢の参宮ブームを支えてきた御師と、伊勢信仰の一つの要素としての御師の歴史的意味も振り返りつつ、神社本庁の本宗とされる伊勢の神宮の信仰とは何かを考える。そのことは、特に本年が神宮大麻の全国頒布の開始から百五十年という点と、伊勢への参宮、神宮の奉賛活動についても視野を広げて、御師だけではなく伊勢信仰全般を考えることによって、改めて多様な観点から伊勢信仰の魅力を探ってみたい、あるいは神道文化との接点を探り出してみたいという企画です。

今回、残念ながら、新型コロナウイルスの感染拡大によつ

て、感染防止の観点からも一同に会することができません。そのため、Zoomでのリモート形式で座談会を開催することになってしまいました。しかし、このような社会情勢だからこそ、神道文化会を通じて、令和の新たな時代の伊勢信仰の在り方を考え、神宮の奉賛や神宮大麻の問題等に対する意義や理解の学問的な地平を広げていきたいと考えています。次の第六十三回の神宮式年遷宮に向けて考えますと、現在の時期はちょうど黎明期、もしくは胎動期といえますか、狭間の時期にあたりますので、本格的に遷宮が始まる前のこの時期に伊勢信仰について学術的にも少し考えておき、そして伊勢の神宮の魅力や意義、種々の価値も含めて広く伝える方向性を、本日お見えの先生方の知見を頂戴しながら、探り出していきたいと思います。

この座談会を通じて、神宮大麻の話であったり、伊勢の参宮の話であったり、あるいは地域における参宮講の問題、いわゆる伊勢講のことですが、こういった問題についても広くお話し戴けるものと思っております。

また、神社界では「本宗」と称されるように、皆が尊く仰ぎ奉つてきた神宮ではありますが、その本宗の奉賛に関して神社、神職の役割についても、本座談会での議論で改めて考えることによって、神道文化会の活動も含めてですが、斯界がなすべき役割も改めて考え、見つめ直してみたいと思つて

おりますので、先生方、どうぞ宜しくお願い致します。

私自身が今日の座談会の司会とともに、神道文化会の理事という立場もあり、座談会の趣旨を説明させて頂きました。司会の方でこれ以上長々と話してもいけませんので、趣旨の説明については、このあたりに致したいと思います。

さて、本日は、リモート形式ではありますが、四名の先生にお集まりを戴きました。先生方のご紹介を致します。

まず、最初は伊勢の神宮の主事をお務めで現在、神宮文庫に勤務しておられます窪寺恭秀先生です。また、お二人目は同じ伊勢の地から、皇學館大学名誉教授の櫻井治男先生です。ついで佐賀から呼子八幡神社宮司の八幡崇経先生、四人目が埼玉から久伊豆神社の禰宜の小林威朗先生です。この四名に加えて、さきほどご挨拶戴いた岡市仁志事務局長にもオブザーバーとして参加戴き、適宜、コメントを戴ければと考えております。

四名の先生方は、それぞれ、学会での研究発表や論文、さらには『三重県史』や『伊勢市史』などの執筆を通じて伊勢信仰や神社の問題に関する成果や業績をお持ちの方でございます。とくに小林先生におかれては、埼玉県神道青年会の有志を率いて、このたび『埼玉県の伊勢講』という大規模な伊勢講にかかる調査報告書を刊行され、ご自身がその編纂にも深く関与しておられます。また、櫻井先生、八幡先生と司会



武田信縄願文【幸福大夫文書】（『山梨県史』資料編5 中世2 別冊写真集）

の藤本につきましては、駒澤大学の長谷部八朗学長（当時）、國學院大學研究開発推進機構の武田幸也助教らとともに、五年ほど前ですが、神道宗教学会のパネル発表「近現代における伊勢信仰と担い手の諸相を考える」で伊勢信仰にかかる研究発表の機会を持たせて戴いたこともありました。その折の御縁もあり、今回は伊勢の神宮から、中世後期の伊勢信仰の研究が御専門の窪寺恭秀先生と、埼玉から小林先生にも入って戴くことよって、先のパネル発表では、近現代が中心でしたが、今日の座談会では、さらに時代を大きく広げて、様々な話題を扱ってみたいと思っております。加えて窪寺先生が神宮文庫に主事としてお勤めでもありますので、普段から時代を問わず神宮にかかる学術情報や所蔵されている様々な文献に接しておられる観点からも興味深いお話を頂戴できるのではと考えております。

まずは、話の取っ掛かりと致しまして、伊勢信仰は、先ほど申し上げた通り、中世以降の御師の存在がその信仰の発展、拡大に非常に大きな役割を果たしています。伊勢の御師の成立は、無論、中世に遡りますので、中世が御専門の窪寺先生の方からまず、伊勢の御師の成立についてお話戴ければと思います。なお、窪寺先生は中世とはいつても戦国時代以降が御専門ですので、御自身の御専門の見地から結構ですので、その時代の御師の活動についてもお話をお願いできればと思

います。どうぞ宜しくお願い致します。

窪寺 御紹介戴きました、神宮主事の窪寺と申します。宜しくお願い致します。神宮文庫には凡そ三十一万冊の図書・資料を架蔵しています。その中には伊勢信仰に関する資料、とくに伊勢の御師に関する古文書を数多く所蔵しています。

今、櫻井先生の方で一枚の画像を共有戴きましたが、まずはこの画像を通じて簡単に自己紹介がてらお話を致したいと思います。これは、神宮文庫に所蔵されている「幸福大夫文書」という古文書の中の一通です。幸福大夫というのは伊勢の御師でありまして、今の山梨県、甲斐国の武田氏とその家臣団と師檀関係、つまり檀那と御師の關係にありました。

この文書は、武田信玄の祖父に当たる武田信繩（のぶつな）という人物が、伊勢の幸福大夫に宛てた文書になります。その文書には「謹んで伊勢天照大神宮の御宝前に奉納」すると書かれています。神宮の御宝前に奉納しますと。何を奉納したかというのがその隣にある「腹巻」です。ね。「腹巻」とは身体を守る甲冑のひとつですが、奉納した理由は何かというのと、「右、当病即癒」とあります。つまり幸福大夫を通じて病氣平癒を神宮に祈願した内容の文書になります。ただ、この文書は年未詳で年代が確定できないのが残念ですが、信繩は永正四年（一五〇七）に病歿しています。こういった祈願依頼の文書や御祓大麻の授与に対するお礼状といった文書

を神宮文庫では沢山所蔵しております。

なぜ、これを御紹介したかと申しますと、実はこの「幸福大夫文書」が神宮文庫に所蔵されているということを恩師である恵良宏先生から教えて戴き、学部時代からこの文書を用いた研究を致しておりました。それが契機となって大学院でも御師について勉強を少しずつ続けていたという経緯もあるということでご自己紹介がてら紹介致した次第です。

それでは、御師について少々概説的なお話を申し上げたいと思います。

現在、NHKの大河ドラマ「鎌倉殿の十三人」が毎週日曜日に放映されています。鎌倉幕府の第二代執権を務めた北条義時が主人公のドラマですが、まさに鎌倉殿と称された源頼朝の時代は、御師とも所縁の深い時代といえます。

例えば、祭主の大中臣氏の一族にあたる永江藏人頼隆という人物が、頼朝の御家人になって側近に祇候して、御祈祷や御祓などをしていたということが『吾妻鏡』に登場します。『吾妻鏡』の治承四年（一一八〇）七月二十三日条に「永江藏人大中臣頼隆、同じく初参す。これ太神宮祠官の後胤なり」と頼朝の下に馳せ参じたという記事です。また頼朝挙兵の前日には一千度の御祓を行ったことも同書に出てきます。頼隆は相模国の波多野荘の豪族・波多野義常の下に身を寄せていたのですが、この波多野氏と内宮祠官の荒木田氏は婚姻関係



窪寺 恭秀 氏

にあったことが指摘されています。相模の大庭御厨（神奈川県藤沢市周辺）もそうですが荒木田氏も東国に進出していたのです。

あるいはもつと有名な話ですと、外宮権禰宜の度会光倫（生倫）、光親らは頼朝の依頼を受けて千度祓・万度祓などの御祈禱を行い、安房国の東条御厨（千葉県鴨川市付近）や武蔵国の大河土御厨（埼玉県越谷市・三郷市付近）を寄進されたという話も『吾妻鏡』に出てまいります。

つまり、この時代には、内宮祠官の荒木田氏や、あるいは外宮祠官の度会氏は、御厨、御園の寄進に伴って口入神主（権禰宜層）として、主に東国の太平洋沿岸の諸国に進出していました。その御厨の在地領主と口入神主の神宮祠官のやり取りの中で、いわゆる師檀関係を結んでいたと言われています。

伊勢の御師
というのは「おんし」と呼びますが、神宮以外の神社にも御師が存在し、神社信仰の拡大に大き

な役割を果たしました。他の神社の御師は「おし」と呼びます。一番有名なのは熊野信仰を担った熊野の御師（おし）ですね。熊野の御師の方が伊勢の御師よりも歴史の上では早くに登場しますが、伊勢の御師は「おんし」と呼ぶ。どうしてこのような呼び方に差異が表れるのか、呼称の相違点、或いは言葉の表記の問題について先学がその語源を求めて色々な説を述べておられます。

その一つは、御師は御祈祷師（ごぎとうし・おいのりし）、御祝詞師（おんのりとし）という言葉が縮まった語だろうという説で、かつてはこの説が大方の語義の理解として認識されていました。しかしながら、神宮禰宜や神社本庁総長などもお務めになられた櫻井勝之進先生が指摘されているように、この語は「御師匠（おししょう）」という言葉が縮まった語ではないかという説もあります。伊勢の御師の場合は、御祈祷師や御祝詞師ではなくて「御師匠」で、「おし」ではなくて「おんし」と呼ぶようになったのだと。これを単に伊勢志摩地方の訛りではと言われる方もいたようですが、俄かには判断できません。古い言葉が残って「お」と「し」の間に「ん」が付くのか、それも定かではありません。近世の古文書の中には御師と同じ意味で、「師職」と記されるようになります。ここでもやはり、師匠の「師」ですね。また「師檀之契約」という文言があります。師檀関係という言葉もある

るように「檀那」の人々を導いていく「師」ということだと思われませんが、その点でもやはり「御師匠」という言葉の方が縮まったものだと考えるのが相応しいのではないかと思います。

先ほども触れましたが、鎌倉時代以降は荒木田氏や度会氏の一族の人たち、中でも権禰宜層の人たちが、主に御厨の神主として在地の人たちとの接点から伊勢信仰を広めていったと考えられています。特に東国では、御厨と伊勢の祠職との間で関係を結んでいたということです。そして、神明社も御厨に勧請されていきます。

南北朝時代を経て室町時代以降になりますと、伊勢信仰は全国の津々浦々まで広がりをみせていきます。この頃からかなりの人々が伊勢参宮を行っていたことが交通史研究の大家である新城常三先生の研究で明らかにされています。その要因として考えられているのは、宿駅制・水運などの交通網の発達や伊勢講の結成などに加えて、神宮と各地の人たちとを結んだ伊勢の御師の存在があるとされています。

中世後期から近代初期にかけて沢山活躍するのは宇治・山田の地下人層の御師です。彼らは荒木田・度会両氏の門流ではありますが両宮の禰宜に補任されない一族であったり、或いは異姓家と呼ばれる世襲神主家以外の出身で、神宮に御奉仕している人達であります。下級の神主と言えいいでしょう。

うか、そういう階層の人々が主に御師の活動をしていくようになります。例えば室町幕府の足利將軍家の御師を神宮祭主の大中臣氏が勤仕していたり、あるいは管領の細川氏には内宮祠官の藺田氏や大宮司に仕えていた三日市大夫であるとか、守護大名の大内氏には高向二頭大夫がいったように、幕府の有力者との師檀関係を通じて神領の寄進や領国への御祓大麻の配札といった活動が展開されていきます。

この時期には既に伊勢講というのが存在しますが、例えば、京都の貴族の方では中原康富という中流貴族の日記『康富記』の中に、神明講という講を貴族の人たちと結んで、お伊勢参りをするために集まって皆で伊勢参宮をしたという記事が出てきます。

御師側の資料としては、戦国大名やその家臣団との関わりで、いわゆる御祓大麻を授与したことに對する礼状などは沢山残っています。今、画面上に出しました幸福大夫もそうですが、例えば関東地方を中心にいえば、下野国では、内宮禰宜の佐八神主が御師の活動をしていたり、あるいは房総の三国であれば、龍大夫が御師だったり、あるいは、甲斐国の武田氏では先に述べた幸福大夫、駿河国の今川氏では亀田大夫、相模国の北条氏では上田大夫、越後国の上杉氏だと蔵田大夫とか、そういった形で戦国大名と御師との接点がよく分かっています。

表1 主な戦国大名と伊勢御師の師檀関係

(『伊勢市史』第2巻中世編・p 661より)

国名	檀那	伊勢御師
山城	將軍足利氏	大中臣氏(祭主)
	管領畠山氏	小岐須氏→足代氏
	管領細川氏	蘭田氏(内宮神主)・三日市氏
伊勢	北畠氏	堤氏→榎倉氏
	神戸氏	白米氏
	長野氏・雲林院氏	橋村氏
尾張	織田氏・豊臣氏	上郡氏
三河	徳川氏	春木氏
駿河	今川氏	亀田氏
甲斐	武田氏	幸福氏
相模	北条氏	榎倉氏→橋村氏(織部大夫)
上総	武田氏・里見氏	龍氏
下総	結城氏	藤波氏(内宮神主)
近江	永原氏	北氏(監物大夫)
美濃	斎藤氏	福嶋氏
信濃	小笠原氏	榎倉氏
上野	真田氏	広田氏
下野	宇都宮氏・小山氏・芳賀氏ら	佐八氏(内宮神主)
越前	朝倉氏	西村氏(八郎大夫)
越中	畠山氏	小岐須氏→足代氏
越後	上杉氏	蔵田氏
丹波	明智氏	河井氏
安芸	毛利氏・小早川氏	村山氏
	吉川氏	橋村氏
周防	大内氏	高内氏(二頭大夫)
土佐	長曾我部氏	益氏
筑前	秋月氏	高田氏
豊後	大友氏	福嶋氏(御塩焼大夫)
薩摩	島津氏	山田大路氏(御炊大夫)

ただ、一般の庶民との師檀関係がどうだったかというのは、実はあまりよく分かっていません。戦国時代には、イエズス会の宣教師であつたルイス・フロイスが、貴族も平民も身分を問わず伊勢参宮に赴く様子を目撃しているように、この時代に一般の庶民層が全く伊勢神宮と関係がなかったというわけではなくて、それは単に資料的制約によるもので、近世以前の庶民の参宮については、あまり分かっていないのです。御祈祷の依頼状や配札に対する礼状の他には、「御祓賦帳」というものが残っています。これは御師の配札活動が具体的に分かる資料で、御師や或いは手代がいつ伊勢から各地に赴

いて、その地域の檀家に御祓大麻を頒布したのか、その際にお土産はどんなものを持参したか、あるいはお初穂を幾ら頂戴したか、そういったことを記した帳簿になります。この様な資料から戦国時代位までは、おおよそ大名や家臣レベルでの信仰の様子が分かるという形になります。

こうした点については、今日佐賀から座談会に参加されている八幡崇経先生が詳しいと思います。特に九州地方は、師檀関係が強く結ばれている地域ですので、伊勢信仰が特に拡大していました。とくに中国地方や九州地方では、橋村肥前大夫という御師がおりました。こちらは奈良の天理図書館に沢山の資料が所蔵されております。長崎の久田松和則先生の研究でも知られているところでもあります。

藤本 窪寺先生からは、まず鎌倉時代から戦国時代まで概説して戴き、庶民の伊勢信仰についても少し触れて戴きました。幸福大夫のような、現存の文書などを使って戴きましたので理解しやすく有難い限りです。

また、御師についても「おし」なのか「おんし」なのかという呼び方も含めてですが、御師の語一つ取ってみてもなかなか明らかにっていない部分がありますが、窪寺先生が仰っていたように、なぜ「おんし」なのか、「おし」とはなぜ呼ばないのかという問題も、やはり歴史的な経緯や色々な観点を辿ってみて論じていかなければいけないと思います。

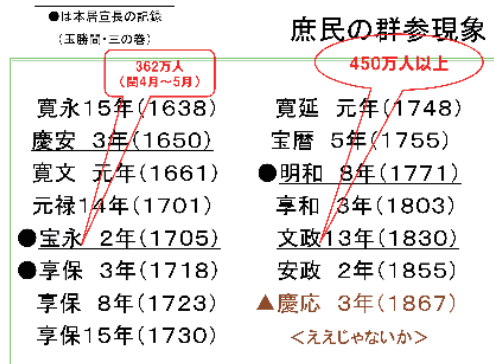
確か、窪寺先生も「中世後期に於ける神宮御師の機能と展開」という自身の論文でもそのような論を述べておられていたかと思えます。

近世に入っていくと、特にまた、御師の役割というのは色々な場面で登場してまいります。先ほど「御師匠」という話もありましたが、近世においては、爆発的な参宮ブームである「おかげ参り」が登場します。こういった点についても、ちょうど昨年、伊勢市で御師制度廃絶百五十年を記念したシンポジウムなども行われていました。次にそのシンポジウムにも携わられていた櫻井先生の方から、近世のおかげ参りとともに伊勢の御師の私邸で行われていた御祈願の様子等も含めて、少しお話し戴ければと思います。

櫻井 先ほど窪寺さんの方から、御師の発生とかその性格について説明を戴いて、特に大名や有力者の祈願受入れ者としての役割、どういう人たちが御師であつたのかといったお話もありました。

近世になりますと、伊勢神宮への参拝は非常に大衆化致します。よく言われることですが、多くの人々が、比較的自由に伊勢に行けるようになったという話です。江戸時代に入つて伊勢参宮が庶民においても恒常的に行われる中で、一つは、ある時期、何年か周期、六十年といわれるのですが、沢山の人々が伊勢へ集中的にやって来る現象が発生しました。これ

庶民の群参現象



がいわゆる「おかげ参り」と呼ばれるものです。

ちよつと説明のために資料を画面で共有致します。

「おかげ参り」と「抜け参り」は、同じ事のように見られますが、「抜け参り」は時期を問わず、随時行われていました。要するに、家人

や勤めているお店の主人に黙ってお伊勢参りに行つたということです。一方、「おかげ参り」というのは、期間集中の群参現象です。突然、仕事を打ち捨てて抜け参りということも起りますが、江戸時代に何度かこの現象が発生しています。一番人数が多かったのが、文政十三年(一八三〇)のおかげ参りです。四百五十万人以上の参宮があつたとされており、相当数の人々が伊勢に来ています。

それぞれのおかげ参りについては特徴がありました。古い時期では慶安三年(一六五〇)に、江戸の商人たちが中心に



櫻井 治男 氏

なってお参りしています。参詣者は、皆白装束を着ていたというので、これも何か、旅というものが非常に緊張を伴う行為で、白装束を着用するというのは、「死出の旅」といいますか、命をかけるほどの覚悟で旅をしていることを示しているとも言われています。

それから、宝永二年（一七〇五）になると、京都の子供らが発端になったということで、三百六十二万人がお参りしたとされています。これについては、沢山の人々が来たことに伴って、不思議なことが色々起こったということで、神異を集めた物語集も出版されますから、各地の人々に「おかげ参り」のすごさが知られるようになるわけです。

享保八年（一七二三）になると、今度は京都の花街の方々が派手な衣装、装束でお参り致します。そのため、その様子

をも見に行こうというところでお参りが増加したのかもしれない。

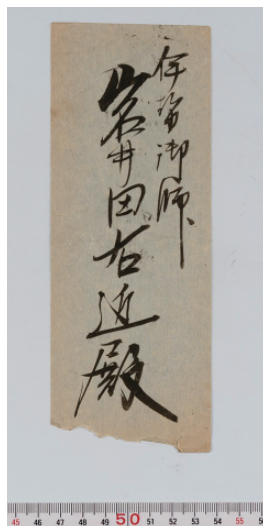
それから明和八年（一七七二）ですが、これは結構面白い記録

が地元に残っておりまして、松坂の森壺仙という方の『いせ参御蔭之日記』や、本居宣長の養子ですが、本居大平の『おかけまうての日記』、これらに詳しく記されています。そこには、神のおかげで神札が沢山降ってきたということで、参宮が広がったなどもされています。

最後、文政十三年のこれが、先ほど申し上げた、最多とも言われるおかげ参りです。

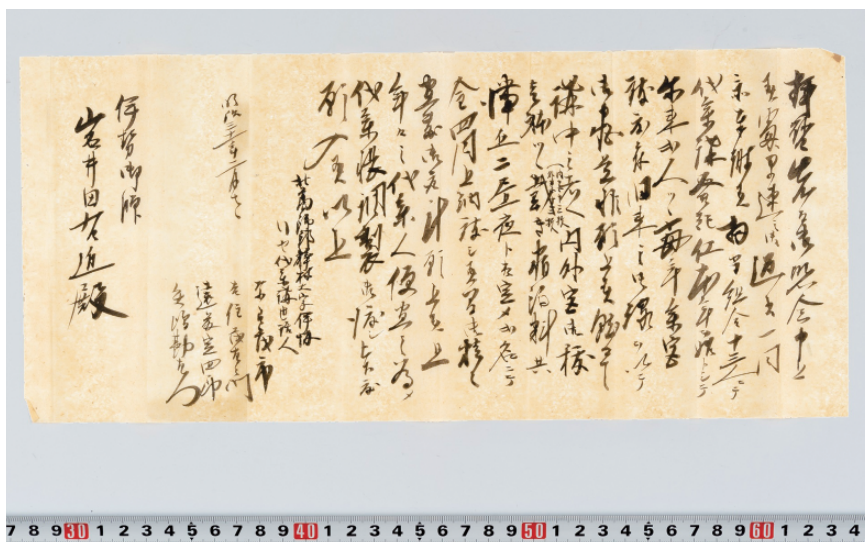
このように神宮を目ざして沢山の人々が伊勢街道を歩いてやって来ますと、道中では病気になる人や、時にはお金も持たずにやって来ますから、それをサポートするようなホスピタリティの形が出現します。これが四国八十八か所の巡礼で見られる接待の伊勢参り版、「施行（せぎょう）」と言われる旅人への支援行動です。

幸い、神宮徴古館から「御蔭群参之図」が出版されておりまして「施行」の場面を見えますと、人々にお茶やお粥を出す。歩くのが大変な人のために駕籠を提供するとか。三宝荒神といって、馬に三つの乗る席が設けてあり、それに乗せて運ぶと言ったことがなされていました。施行宿と呼ばれる宿所の提供もありました。ただ時には多くの人々で溢れ、家の軒先でかろうじて休むこともあります。それから、牛や馬を出す。あるいは、伊勢へ最終的に入ってくる時にも、宮川には無料の渡し舟が出ています。



そうし
た中で現
代的にも
興味深い
のは、「は
ぐれ人詮
議所」と

いつて、参宮の途中で迷子となつた子供を助ける仕組みがあり
ました。これは、本居大平『おかけまうての日記』にも「人
をたづね出て、めぐりあはするわざをする事ありき。そはま
づ上は西町、下は湊町とふたまちにて、その家をさだめおき
て、門にのぼりをたてゝて、はぐれ人詮議所と大もじにする
しおけりければ、まどひ人のあるごとに、みなそこにたづね
きて事のよしかたれば・猶久しくえたづねいでぬは、阿濃
津また山田までさへ、さるべきわたりをとひ合せけり。さる
は山田にも津にも、同いさまにはぐれ人せんぎ所とて、そ
のこものする会所のあれば、そこにとひあはせするなり
けり。」などとなり、思い立つて突然旅立つおかけ参りでは、
子供たちを連れてくる場合もあり、道中も町場もごつたがえ
していますから、迷子になるんですね。その子供たちを救う
ために、はぐれ人詮議所が何か所か設けられていて、それら
が宿場から宿場へとリレー方式で、見失つた子供たちを親の



明治 31 年に伊勢代参講世話人 4 名で岩井田右近宛に出した手紙（上段右上の写真はその封筒）

下へ届けるというような、そういう仕組みまであったのです。

おかげ参りのように、沢山の人々が来たときは特別でしょうが、普段、お参りに来る人たちをもてなす形として、御師が自邸で檀那を泊め、豪勢な夜具や食事を出し旅館業の務めを果たしたり、あるいは今日的な総合旅行者やツアーコンダクターの先駆けと言われるような側面も強く出てくることは確かです。これが、御師に関する役割の大きな柱の一つです。

私としては、もう一つ。先ほどお話の冒頭にありました、明治四年の神宮の御改正で師職の制度が廃止となりますが、それによつて、これまで師職が担ってきた宗教に関わる領域の問題も重要な点と考えています。御祓大麻を全国の檀那の皆さんに届けたり、祈願祈祷を依頼する人たちのニーズに向き合うこと。それから自分のところで参宮者が神樂を上げるため様々な設えをしてきたことなどもあります。御師には、旅館業的なことも当然あるし、両宮をはじめ名所案内、あるいは歓楽街を案内したりする世俗的なガイドとしての役割もあるわけですが、宗教者としての歴史を等閑視することは出来なないと思います。

明治四年で御師制度は廃止になったのですが、私は御師を兼ねていた神宮の旧祠職家に残された資料を、これまで八幡さんたちと調査をしてきました。その調査対象に「岩井田右



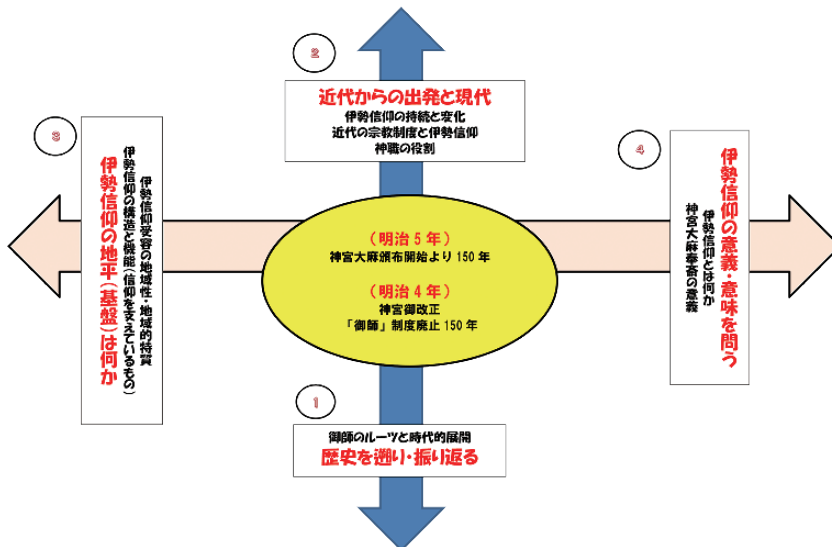
岩井田尚行宛に加え手代の岡部新七の名が宛名にある書状（岩井田家旧蔵）

近」という御師の家があります。岩井田家は、神宮の大物忌父職ですが、同時に神楽殿を持つ師職家です。

いま画面共有していますのが、明治三十一年、埼玉県の北葛飾郡静村の方々、伊勢代参講世話人の四名の名で差出された手紙です。宛名は、伊勢御師岩井田右近となっています。明治三十一年という、御師廃絶から二十五年余を経て岩井田家がそれまで担っていた師職としての名前で手紙が出されているんです。これなどは、廃絶後の御師の状況を知る上で興味深い資料の一つです。

また、封筒を見えますと、この宛先も、伊勢御師となっています。

もう一通は、宛名に「元御師」と書いてあったりします。それから、その横には「手代岡部新七殿」とあります。手代という言葉にも示されるように、明治になってから御師の制度は廃止になったわけですが、元々、旧御師の家には手代と呼ばれる人がいて、その人が埼玉県の旧檀那のところに行つて伊勢参宮を勧めたり、伊勢と結びつけるような役割を、御師廃絶後、二十五年経った時期にも担っていたという事実です。この時代としてはレアなケースかもしれません。しかしながら、このように廃絶後も旧檀那地域との関係が続いていた連続性を踏まえて、近現代の伊勢の信仰を見てゆくと非常に興味深いのではないかと思っています。



伊勢信仰と神道文化（機関誌『神道文化』座談会：議論の4方向）

一旦、そういうところで紹介をさせて戴きました。

藤本 櫻井先生、有難うございました。

先ほど窪寺先生のお話にもありましたが、御厨にゆかりのある地域との関係性において御師が発生してその後、戦国大名ら地域の有力者との接点を持つていつて、その後、江戸時代に入っていくとさらに、御師の性格、あるいは役割、それから当然、パトロンになる大名との関係、そういったものの在り方、在り様が見られるわけです。この点について、少し画面を共有させて戴きながら、さらに本日の座談会の論点となる点について少しお話をしたいと思います。

実は、櫻井先生の方から、座談会の議論の方向性というところで「伊勢信仰と神道文化」をどのように考えていくのかというところで画面にお示ししたような四つの方向性、視点を戴いております。私の方で、最初にお話しすればよかったんですが、まず一つ目は、今お二方の先生にお話戴いた「御師のルーツと時代的な展開」ということで、伊勢信仰を御師の歴史を遡って振り返りながら、近代、現代まで見ていこうという縦の流れと。その間にあるのが、明治四年、五年の御師の廃絶と神宮大麻の全国頒布の開始という事象なんです。

一方で、先ほど来、櫻井先生が仰っていたように、伊勢信仰を担ってきた御師の性格、あるいは地域性、そういう特質といったものをどのように考えていくか。先ほども既に、御

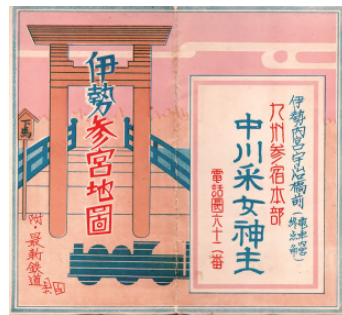
師の岩井田家の話や、あるいは窪寺さんの方からも出てきました橋村大夫の話、これは九州の御師ですが、この橋村大夫については、今日は八幡先生もお見えになっていますので、後ほどお話を伺えればと思っています。

実際に、櫻井先生も関わっておられたと思いますが、例えば、近年の書籍では甲斐素純さんが書かれた『伊勢参宮日記を読む』という本があります。九州北部を中心としたものですが、このような本も刊行されていますし、その意味では、参宮日記も興味深い観点です。先ほど櫻井先生からも『いせ参御蔭之日記』や『おかけまうての日記』なども紹介されていましたが、同じく近世には、例えば講古堂主人の『伊勢両宮按内記』などもあります。こういう、伊勢参宮のいわゆるガイドブック的なものも、近世に遡ることができます。

また、ツアーコンダクターという言葉が、先ほど櫻井先生から出されましたが、御師はその成立以後の展開のなかで様々な役割を担っていました。これは、現代の神職であったり、あるいは旅行代理店であったり、いろいろな職業に引き継がれていまして、今の宗教文化的なもの、あるいは観光文化的なもの、こういったものの側面の中心、原点にあるのが御師の活動であるといえます。これは、神道教化の側面を考えても、参考にすべき点も多いですし、非常に面白い部分だと思っています。

先ほど「おかげ参り」のことも触れて戴きましたが、担い手である御師が明治維新以降に大きく変革を遂げていくわけです。そういう中で、岩井田家のお話もありました。御師が廃絶前後でどのように変わっていかということについて、次に八幡先生にお伺いしてみたいと思います。先ほど九州の橋村大夫の話も登場しました。九州の伊勢信仰の状況なども含めて、あるいは櫻井先生と御一緒に調査された岩井田文書などに関連して、檀家が あった 関東地方の話もあるかと思えます。かつて櫻井先生が代表となられて助成を受けた科学研究費（平成二十三年度～二十九年 度「近代の伊勢神宮改革と御師制度廃止に伴う伊勢信仰の相克に関する基礎的研究」、 「伊勢神宮の御師廃止と参宮者の関係性再構築に関する調査研究」）にて行われた学術調査なども含めて、お話を頂戴できればと思います。

八幡 先ほど、お二方の先生から御紹介戴きましたが、私は伊勢信仰の特に民俗学的な部分との関わりで長年調査を続けてきました。加えて、先ほど櫻井先生から紹介のありました内宮の大物忌父であった岩井田家の資料、その後、近代になります、内宮の御師と同じく中川采女家の宿泊名簿、こういうものを史料として拝見する機会がありました。それと、伊勢信仰の調査としては、奈良県の山辺郡山添村の菅生地区の伊勢講の資料を拝見する機会がありました。奈良県の民俗



「中川采女」の名が見られる地図

芸能の緊急調査の報告書にも概要を纏めました。が、江戸時代中期からの資料がかなり残されています。

岩井田家の文書については中世の史料も残っていますが、御師関係のものとしては、やはり江戸末期から昭和十年代まで

のものが多く残されています。

例えば、「中川采女家旧蔵伊勢神宮参宮記念名簿」ですが、旧御師の中川采女家は、岩井田右近、柳谷大夫らとともに、共同で宇治橋前ところで旧御師・岡田七郎大夫邸を用いて神洲館（鈴七）という宿泊施設を運営し、「九州参宿本部」を名乗って宿泊の斡旋をしていました。この宿泊名簿に出てくる檀家は、おおよそ大分県、福岡県、熊本県、特に筑後川水系の周辺に居住する方々です。これが江戸時代末、慶応二年頃から残され、昭和十八年が一番最後です。この史料が貴重だと思われるのは、宿泊者の名前と住所などが記録されています。また、全部ではありませんが、年月日が記載されています。この中川采女の資料は、江戸末期から近代にかけて

伊勢参宮の傾向がどのように変わったかを知る、大変貴重な史料だと考えられます。

こうした岩井田家の資料をはじめ、中川采女の資料、それと奈良県の資料など、江戸末から近代にかけての資料を見る機会がありました。近代化の中で、神宮が国家の管理となり、御師が廃止となつて、その旧御師がどのような手当てを檀家の人々に行っていたかということが、特に岩井田家の資料などを見ると知ることができます。

神宮の御改正の時期に岩井田家の当主であつた岩井田尚行という方は、神宮が国家管理になつてからも祠官を辞めずに、神宮の権禰宜として明治二十八年まで神宮司庁に勤務して、特に神宮大麻の規則を作成する任にありましたので、その折の草稿などが残されています。岩井田家の資料は、近代化の中で御師の動きも窺うことができますし、明治初期の神宮司庁の動きも少し窺い知ることができるという点で本当に貴重な資料です。

岩井田家の檀家地域としては、埼玉県、北関東辺りが中心で、昭和十年代までは神宮の社頭で授与大麻を受けて、師檀関係のあつた旧檀家へ送るといふ、江戸時代と同じような形で、埼玉の地元の講組織をサポート、ケアしていました。しかし岩井田家の資料の中には大正時代になつてから、それまでの檀家の世代が替わつた際に伊勢講の組織がうまく引き継



(電六二六番) 伊勢宮内宇治橋前 神洲館全景

岩井田家、中川采女家らで運営していた神洲館（鈴七）（絵葉書）
右側に岩井田右近の名が見える



八幡 崇経 氏

がれなかったとか、頒布大麻として岩井田家から送られてくるものと、授与大麻としての神宮大麻との違いについて質問した手紙が残されていました。それに対して岩井田家が丁寧に答えた控えなども残されていて、神宮大麻の頒布が充実してきたことや、参宮が容易にできるようになった時代背景などを映していた点でも、岩井田家の資料は貴重な資料であると考えています。

こうした旧師職家の史料を拝見する機会とともに、佐賀県内の伊勢信仰についても調査していました。佐賀市には伊勢神社というのがありますが、この神社は「九州で唯一のお伊勢さん」というキャッチフレーズで紹介されている神社です。

この伊勢神社は、近代に一時廃れた伊勢信仰を発展させるために、地元
の商工業者をう
まく巻き込んで
講の再編を行いま
した。江戸時代、
伊勢神社は九州
の肥前国で大きな
檀家を抱えていた
橋村肥前大夫の逗留先

となる伊勢屋と呼ばれた宿の近くにあり、橋村大夫の活動拠点となっていました。加えて江戸時代に檀家から初穂米を集積する場所ともなっていました。そのため、神社のある伊勢町が近代になってからも米穀の取引の中心地であったということもあって、商工業者を巻き込んだ伊勢講の再編の中心となったのが伊勢神社です。そしてその信仰圏は、佐賀県内の伊万里市や武雄市、唐津市など県北西部、さらに長崎県平戸市、松浦市、杵岐、五島列島まで及んでいて、二月十一日の大祭は今でも賑わっています。御師の廃絶後の佐賀という一地域における伊勢信仰の再編の好例という印象をもっています。

もう一点は、福岡県です。これは、櫻井先生とともに調査に行ったところですが、福岡県糸島市の櫻井神社内に鎮座する櫻井大神宮や糟屋郡久山町猪野の伊野天照皇大神宮という福岡の黒田藩が関わったお社があります。この二社もやはり黒田藩における伊勢神宮信仰の拠点になっていました。福岡県内の中川采女の檀家の地域を調べていくと、境内や拝殿の中には、参宮の絵馬があったり、記念の灯籠など、参宮記念物というようなものが大変多く残されています。

福岡県では、社寺の絵馬を県内全域で悉皆調査がされていて、地域別で四冊の『福岡県の絵馬』の報告書に纏められています。それを見ると、福岡県のかんりの地域に伊勢参宮の

絵馬が残存しているのを窺い知ることができました。後で埼玉県内の事例を小林先生がお話しされるとは思いますが、時代的な背景のものもあるかもしれませんが、やはり明治時代になつてからの絵馬が当然のことながら格段に多い。そうした参宮記念の絵馬が福岡県内に大量に残されているのを見ますと、神社では丁重に拝殿に飾つてあります。こうした伊勢信仰の記念物を神社自身、神職自身が今後も大切にしていけば、現代における伊勢信仰を広めていく上での一つの教化資料、素材としていけるのではないかと感じました。

後程、お話があるとは思いますが、小林先生が埼玉県内の伊勢講の資料調査に入られる前に仰つていたのが、「お地蔵さんは教科書に載るが、伊勢の参宮講碑については小学校の教科書には載っていない」、「沢山ある県内の伊勢講碑などから、こうした伊勢信仰の歴史があつたということをお地蔵さん以上に取り上げて残しておかないといけない」という言葉でした。私はこうした先祖の残した信仰の歴史は、神職自身を意識として持つて伝えていくべきだと思えます。もちろん、今は神社本庁を通じて神宮大麻が全国の神社に頒布されるというシステムになつてはいますが、地域に残されているこういう伊勢信仰の歴史、存置物をもつと見直して発信していくことで、地元の人々は先祖の信仰を再認識することになり、伊勢に対してもつと親近感が増すのではないかという感じが

致しました。そういう意味で、埼玉県神道青年会のこの調査への努力は、伊勢信仰の歴史を未来へと継承するためにも洵に評価すべきものであると思つた次第です。

藤本 伊勢信仰の問題を考える上で、八幡先生のお話に、参宮にかかわる民俗とか参宮記念物というお話がありました。伊勢信仰の構造、信仰を支えているという点で、地域性や地域的な特質を窺う上で、先ほど絵馬のお話もありましたが、そうした奉納物も大きな視点になるうかと思えます。また、参宮・参宮講の記念碑等も各地に存置していますね。この点については、この後に埼玉県内全域で伊勢講にかかる記念碑などの悉皆調査をなされた小林先生にもお伺いしようと思つております。

伊勢信仰を語る上で、やはりどうしても参宮行動や神札である御祓大麻、神宮大麻の問題、あるいは暦の問題といったところに行きがちですが、その一方で、地域性や地域的な特質、あるいは地域の中における伊勢講や伊勢の参宮を考える上で、伊勢信仰の重要な基盤になる部分、信仰の持続性といった部分を考える上で、先ほどは昭和初期まで「九州参宿本部」を名乗つた旧師職の中川采女の話などもありましたが、そういった点をどのように窺い知るか、学術研究としては、櫻井先生が科学研究費を使つて六年間にわたつて継続的になされてきたかとは思いますが、まだまだ未開拓の領域ではないか

と考えています。

そういう意味でも、今回、新たな地平を切り開かれたのではないかと考えているのが、小林先生のご尽力です。埼玉県内の伊勢講碑や参宮記念碑、こういったものを埼玉県の神道青年会を率いて全域で悉皆調査をなされたのが小林先生です。戦後の神宮の奉賛については、後ほど伺おうと思っておりますので、小林先生からは、まずは先ほどの八幡先生や櫻井先生の発言に繋がる話題ということで、埼玉県神道青年会でなされた伊勢参詣資料の調査について、お話しを戴きたいと思います。

小林 小林と申します。宜しくお願い致します。各先生方



『埼玉県の伊勢講』見本

のお話を伺いながら、自分のやってきたことをお話するのは大変恐縮に思っています。

八幡先生から御紹介を戴きました通り、埼玉県神道青年会の事業の一環で、名称は「埼玉県における伊勢

参詣資料調査」と名付けたものでしたが、県内の伊勢神宮にかかる参詣資料の調査を行いました。その調査報告集がようやく今月、神社新報社から刊行することが出来まして、先ほど皆さん方に一部をお見せ致しました。櫻井先生、八幡先生には、本事業にご協力を戴き洵に有難うございました。

このたび刊行する『埼玉県の伊勢講』では、約三千点にのぼる神社境内の石碑、灯籠、狛犬や、拝殿などに掲げられた絵馬などを可能な限り県内全域を対象に調査して一覧できるように掲載致しました。こうした参詣資料の奉納の年代は、古くは近世、江戸時代からありますが、参詣資料の中心は、明治時代以降のものです。近世に奉納されたものは割合でいくとおおよそ五%ぐらいです。六十数点しかありませんでした。それゆえ、参詣資料の割合としては、先生方が先ほどお話されていたように明治時代以降のものが大半、メインであるといえます。

また、調査の方法については、一人で全域の調査を行う訳ではありませんが、やみくもに県内の神社をとにかく巡回して調査するという訳にもいきません。それゆえ、神道青年会の会員の日程・都合を繰り合わせて計画的に調査を致しました。埼玉県では偉大な先輩神職らによって作成された『埼玉の神社』という分厚い神社誌が、全三巻揃いで刊行されています。それには、各神社の境内の地図が掲載されていて、参



小林 威朗 氏

宮記念碑などといった名称で石碑が描いてある部分がありますので、それらをもとに自分たちで計画立てて調べて回ったというわけです。当初の予定では、仮目録を作った段階では約千七百ほどと見込んでいましたが、実際に各神社を廻ってみると、倍近い参詣資料の数となつて、県内の神社には約三千近くの参詣資料が残存していたという訳です。

ただ、三千点とは言つても、実は一点、一点の資料にみられる情報から判明することはごく僅かで限られています。一つ一つの資料から窺い知ることには限界があります。それゆえ、物によつては、非常にぎつくりとしたことしか書いていない、判明しないものも多い訳です。例えば、参宮碑からは皆でお参りをした日と行つたメンバーしか書かれていない場合、この時代にただ伊勢神宮にお参りに行つたよということ

しかわかりません。ただし、講碑や記念碑によつては、時折、詳細な文章が付記されてあるものもあつて、そういう碑が

頼りになることがあります。あるいは、偶然ですが、地域によつては、昭和期の自治体史、いわゆる郷土史に参宮の報告、日記などが記されている場合もあつて、それらの資料の中に「みんなの集めたお金で最後、灯籠や記念碑を建てた」というようなところまで追つかけることができることもあるものですから、年代しか判明しなかつた記念碑に確固たる史料的な裏付けが取れるようなものもありました。それらを用いてこの時代の伊勢の参宮はこういう雰囲気だなされていたんだということを追付けていつて、調査に利用した自治体史とともに、巻末に報告書という形で今回の調査の経緯や調査結果に基づく分析を収録したという次第です。

埼玉県は関東地方ですので、東海地方の伊勢までは遠い地域です。それゆえ、近世から明治時代の中頃までは、恐らく徒歩で行つていて多くの日数を要していたと考えられますが、明治の中期以降からは鉄道で行く記述がどんどん増えていきます。参宮をするにあたつては当然、お金がかかりますので、参宮する方々の経済的なレベルによつても費用や手段も異なるとは思いますが、そういったことも石碑に書かれていたりするのも興味深い点です。

それから、この参詣資料の調査で分かつてきたこと、今後もっと調べていかなければいけないと思うことの一つは、参宮にかかる神社への絵馬の奉納は、それほど数は多くはない

が、近世に見られた絵馬と明治以降の絵馬では、絵馬に描かれる内容に変化が見られるということも明らかとなったことです。絵馬に描く絵は、恐らくは何かを手本に描かれていると考えられます。例えば、江戸時代であれば『伊勢参宮名所図会』のような伊勢に関する絵図を手本にして、それを、参宮した人たちの人数に合わせて、絵図に出てくる参拝者の頭の数に合わせて書き直したりするんですが、そういう絵をもとにした構図となっています。

江戸時代が終わり明治時代になると、この絵馬に描かれる構図が変わってきます。恐らく、明治時代にはまた別の絵馬の手本になるものが出てきたのだと思いますが、県内における明治期の参宮奉納絵馬は、大半が巫女が舞っている絵馬に変化しているのが特徴の一つです。近世の参宮奉納絵馬は、御師の私邸のような殿内の場所御祈禱をしているような絵が多かったものが、明治時代になると、巫女が舞を舞っている光景に変わっていくというのも調査で明らかになったことの一つです。

また、伊勢講の石碑に書かれている言葉に注目していくと、やはり、各時代の状況を反映しています。大半は表に「参宮記念」などと書かれたものが多いのですが、とくに明治時代の中期以降から少しずつ、書かれていることに教訓のような、道徳的な教えにあたるような意味合いの言葉が徐々に登場す

る傾向があります。それも興味深い点だと思っています。

近世の参宮記念の灯籠などには、大体がお願いごと、祈願の内容が記されているんです。「五穀豊穰」と書いてあったり、城主の「武運長久」が祈願されていたり、伊勢講中の「子孫繁栄」と記されていたりします。しかしながら、例えば、幸手市の雷電社湯殿社合殿にある伊勢太々御神楽講と記された記念碑には、明治四十二年ですが、「聖訓」と記された九か条の道徳訓が刻まれています。

神に祈り真の道を行ふて善良の人となる事

父母の命には背かずして孝道を全ふする事

人が交はるに正直温和にして深切を盡す事

などといったもので、講員の人たちはこういう九か条を守りなさいというようなことが書いてあります。お伊勢さんにお参りする以上は、仕来りではないですが、そういったものを守るような意味合いで道徳訓が書かれているのだと考えています。

分析的なことから神道青年会での調査の内容の方に、少し話を戻してみたいと思います。明治以降、神社境内に石碑を建てるという行為自体が府県に対して申請して許可を得るべきものでありました。それゆえ、勝手気ままに神社に石碑を建立したというわけではありません。官憲の許可の下に建立しなければいけないものでしたので、そうした許可申請文書



埼玉県伊勢参詣資料
調査Map
(QRコード)

の一部が、埼玉県公文書館に所蔵されていることが明らかとなりました。青年会では調査がてら公文書の方も一応閲覧してみたのですが、なかなか現存する記念碑と、公文書館に所蔵されている建立にあたっての許可申請の記録とが被らない。被るものも一部ありましたが、そういうものと重なる場合は、既に大半が自治体史、地誌の方で掲載されていて、例えば、加須市では、『加須市史 資料編Ⅱ』を繙くと調査した石碑が掲載されているのです。

青年会でもこの石碑の調査をする前に市町村史をもっとよく閲覧して事前調査をしておく、色々な調査ができたはずなのにと思っております。事前準備が少々甘かった点があり、その点では残念でした。自分たちは一生懸命、志を持って調査をしたつもりでしたが、市町村レベルのことであれば、地誌、郷土史の方でも研究をなされてきた方々がいますので、それらの業績を上手に酌み取りながら調査に生かしていかなければいけなかったんですが、その甘さが実地調査のレベルでもあったと思います。

最後にもう一点付け加えますと、今回の調査では、参宮の記念碑、つまり石碑等に主眼を置いて実施しましたが、埼玉県内でも参宮

の際に記念の石碑を建てない地域、地帯というのがありました。これが興味深い、面白かった点だと思えます。秩父地域には、実は伊勢参詣の石碑が全く見つからなかったんです。その理由はよく分かっていますが、そのような地域がありました。

図だと少々見難いのですが、画面共有を致します。神道青年会で調査に行く神社を、Google マップにプロットしたものです。最初にプロット作業をして、そこを順番に回るという方法をとりました（マップは本頁掲載のQRコードから閲覧可能）。

秩父地域については、印はポツポツとついています、これらは、先に述べた『埼玉の神社』の中に過去に伊勢講があったという記述がありますので、そこには伊勢参宮の記念碑の建立がある可能性が高いと思つて、調査の主要ポイントにしておりました。そのためにプロットをして、その地を含めて秩父地域を回ったのですが、この秩父地域には伊勢の参宮の石碑が見つかりませんでした。

一方で参宮の記念碑が多く、プロットが濃い地域は北埼玉です。先ほど御師の岩井田家が檀家としていたエリアというのは、すごく参宮碑の密度が濃い地域なんです。北埼玉から南下するほど、参宮碑の密度は薄くなるような形です。北足立、今の太田や浦和、川口とか、今でも埼玉県内の主要な大

きな都市があるところの参宮碑の密度は濃いです。それが県西部に行くほど、薄くなるというイメージで考えて戴ければと思います。

地域的には秩父地域には参宮碑が発見できませんでした。ただし、付け加えておきますと、秩父エリアは昔から伊勢神宮への参宮が非常に盛んで、この地域に伊勢神宮への崇敬心がないわけではありません。伊勢から御師もすぐ熱心に通っている地域です。三峯山の上まで、伊勢から三日市大夫の手代が毎年、一生懸命登山して、通っている記録もありますし、伊勢信仰がないという地域ではありませんが、なぜか石碑が建立されていません。県内でもそういうエリアがあるということが分かりましたというのも一つの収穫でした。

藤本 有難うございます。絵馬の話も含め、参宮碑の建立の地域差は大変面白いですね。

先ほど、建碑の話がありました。参考までですが、大原康男先生が書かれた『忠魂碑の研究』（晩書房）に各県から建碑の申請をめぐってやり取りがあった話なども出てきますが、埼玉県のやり取りも同書では具体的に記されており、その他、各県で碑表の建立申請に関してはかなり何度も照会のやり取りが行われていますので、その点も参考になると思います。

また、千葉県神社庁が平成二十五年に発刊した『房総の伊

勢信仰』（雄山閣）にも飯香岡八幡宮の平澤牧人宮司が神社の参宮記念の奉納絵馬の話を書かれています。千葉では埼玉とは若干異なる様相が見られますね。そうした成果物ともリンクさせていけば、今後さらにこの問題が深化していくのではないかとも思った次第です。

私の方でもその絵馬の絵の構図に関連して少し紹介しておきます。今画面共有しているものは、昭和十一年の伊勢参宮記念の土産物として売られていた絵です。また、こちらも、戦後ですが先の絵と似た構図で上部に描かれているのは、神楽殿のような場所で舞を舞っている巫女の絵です。もう一枚、こちらは明治後期のものだと思われませんが、これも同じように、上部の絵が巫女が舞を舞っている絵が描かれています。大正期にも神楽殿で巫女が舞う絵葉書がありますので、伊勢参宮の参拝記念で販売されていたものからも、やはり时期的なものなのか、近代の伊勢参宮を示す特徴的な描画として、巫女が神楽舞を舞う姿が伊勢の参宮の何か象徴的なものとして考えられていたのではないかと小林先生のお話を伺いながら思っております。

一方で、少し時代を遡ると伊勢の参宮記念の絵図は全般的に伊勢全体の地図というか、伊勢はこういう所ですよというのが多いと思われます。どちらかというと、伊勢の名所順路図のような感じのものが多く作成されています。これが、先

ほど言ったように、時代が下ると少し絵柄が変わってきて、伊勢音頭とか、巫女が神楽殿で舞っているような、そういうイメージのものに変わってくるというのも、参宮講の記念碑ともリンクしてくるのかなと、話を聞いていて思ったところです。

櫻井 私は、先程のお話を伺って、北埼玉地域に記念碑が多いのは、旧御師の岩井田家が関わらざるを得ないような、地域特性があるのかなと思いました。それゆえ、ああいう残存のあり方をしているし、岩井田家は、明治以降も旧檀那とのつながりを大事にしているので、伊勢の神宮にとっても明治以降、非常に大事な地域だったのではないかと考えています。それが徐々に神宮大麻が全国の氏神神社を通じて頒布されていくことに伴い、その頒布システムが順調に稼働すると、旧師職の岩井田家を通じて神宮大麻を戴くという形ではない傾向が強くなる。そこに新たな伊勢参宮の仕組みに埼玉県神職会が力を入れて、あるいは崇敬講がやっていくようになる、全県的に旧師職の関与のあり方が変わってくるようになるのではないかと思います。その点でもさきほどの分布図は大変面白いと思いました。

小林 有難うございます。

藤本 私も先程の記念碑の分布図は面白いと思いました。秩父周辺域に伊勢講碑が少ないというのも興味深い点です。

三田市大夫が秩父地域に頒布のために檀家を廻っている、参宮講碑といったものに繋がらない理由が何なのかと考える場合に、現在でも神宮大麻のお札配りとかにも色々行けれどもなかなか頒布に繋がらない地域、つまり、伊勢神宮にお参りはするけれども、頒布大麻は受けないとか、そういった地域の差異を比較してみると興味深い結果がでるのだとも思います。御師は実際に手代などを使って各家々を訪問して頒布活動をしているわけですので、具体的には実際の檀家の数とか、神明社の鎮座数なども考慮に入れて考えなければなりませんね。

ひとえに伊勢信仰とはいっても、御師の師檀関係があっても地元根づく信仰と、崇敬心、篤信的な信仰が根づいているけれども、具体的な何かの記念物の建碑行動につながらないものは何なのかといったときに、秩父は、日本三大夜祭とも呼ばれるように秩父神社を中心に地元の人々は、冬に秩父夜祭などの大規模な祭礼行動も別にあり、そこでも人的奉仕とともに、毎年、地域で多くの寄附金を集めて奉納しますし、加えて三峯神社の三峯講とかも重層的に存在していて、さらには関東そのものが他の山岳講など様々な講の信仰も非常に強い地域だと思われれます。例えば、奥多摩の山を挟んで武蔵御嶽神社の御嶽講とかも近い地域ですね。この点は、なかなか難しいと思いますが、今後、東京や神奈川、千葉の



武蔵国北埼玉郡東村旗井、日参講について記した文書（岩井田家旧蔵）

方でも同じ講碑の悉皆調査を行うとさらに明らかになっていくんだろうと思います。

神奈川県内でも、例えば川崎市であれば、比較的御嶽講や三峯講が強い地域がありますが、もともと御厨があった地域で神明社が多い地域とはやや外れています。川崎市でいうと、例えば宮前区などは、三峯講なども残存している地域ですが、その地域が伊勢講も非常に強い地域かと言われると、現段階の調査では少し違うような感覚がしています。橘樹御厨があった川崎市の中南部や、横浜市都筑区の方にかけては、御嶽講の碑もありますが、どちらかといえば、明治初期から平成に至るまでの伊勢の参宮記念碑もあり、伊勢信仰が残っていることを窺わせるような路傍の伊勢講碑もあります。

そういうような、講が共存しているか、していないかという問題もあるかもしれないし、共存もしているんだけど、講が強い、弱いというのがあるかもしれない。その意味では、さきほどの分布図は非常に面白いと思いました。

櫻井 こちら、画面に日参講について共有しますね。

武蔵国北埼玉郡の東村旗井というところですが、本宮六十二本、外宮六十二本なんです。この本宮の六十二本というのが、いわゆる頒布大麻です。つまり、これが今の神宮大麻なんです。外宮のほうは、これは神宮大麻とは言わない。今は大麻と言っていますが、両方一緒にこうしてやっていく

んですが、やがては外宮の方がぐんと減っていきます。明らかに差がつくのはなぜか。この当時は、この頒布の数はおかしな数字なのかどうか、ちよつとそこまでは、史料からは分かり難いですが。

八幡先生、何かこれについて補足できることがあれば教えてくださいと思います。

八幡 これは岩井田家文書の明治初期のものですよね。

櫻井 明治二十四年です。

八幡 この日参講の新しく編成した講では、本宮（内宮）と外宮のお札は、頒布大麻でなく授与大麻です。

櫻井 外宮も授与大麻ですか。

八幡 社頭で毎日代参して受けてきたものだと思います。

櫻井 そうでしたか。

八幡 確か、外宮だけ、だんだん数が減っていつています。

櫻井 授与大麻ということは、神宮大麻ではない？

八幡 社頭で出す授与大麻ですね。

藤本 頒布大麻が神宮大麻ですね。

櫻井 これは岩井田家が神宮から受けてこられて、日参講の方に転送されているので授与大麻になるわけだ。

八幡 それで配られている神札は剣祓です。

櫻井 そうですね。剣祓。しかし、これは大麻と言わない？

旧御師から受けているけれども、講社のメンバーから見たら、

これとは別に、岩井田家からの分は授与大麻なので頒布大麻をくださいと言って受けられたのでしょうか。

八幡 ですよ。その辺りがわかり難いところですね。

櫻井 そういう問題はまた、制度廃止後の旧御師の実態にかかる課題となりますね。

藤本 先ほど櫻井先生から見せて戴いた資料の中にも、社長と周旋人という言葉が出てきましたが、特に廃絶前後の御師の問題を考える上で、廃絶した後に神宮教や神宮奉斎会、あるいは各地で神宮教会が設立されていきますし、それから伊勢と東京に神宮教院も設けられますね。伊勢の神宮司庁を中心にして旧御師とは別に、いわゆる全国に神宮大麻を頒布する体制というのは整っていく。あるいは、学問的な組織としての神宮教院の問題もありますが、伊勢への参宮を担う、担い手の側面としての神宮教、神宮教院、神宮教の伊勢大本部という問題も出てきますね。

それでは、これまでの話をつなげていきながら、少しずつ、またお話を進めていきたいと思います。

これまで、伊勢信仰にかかわる歴史を振り返りながらお話を伺ってきましたが、やはり地域性の問題や、そもそも御師の性格の問題、それに伴う宗教文化的な問題、あるいは参宮講碑の問題など、先ほど、明治に入ってからとか、時代が新しくなってから建碑されたものも多いという話も伺いまし

た。伊勢信仰の意義や意味を問う上で、少しずつ近代以降の話にも入っていきたいと思ってるんですが、その前提となる問題として、私の方でも幾つか話題を提供しておきたいと思います。

先ほど、八幡先生のお話、あるいは小林先生のお話にも出てきましたし、窪寺先生のお話とも関係してくると思います。すが、近世の御師のなかで特に檀家が多く、御祓大麻の配札の多かった家として三日市大夫が挙げられます。こちらは、三日市大夫から明治二十七年に発行された「伊勢参宮記念証」です。これは、「伊勢参宿所 三日市大夫次郎」という名前で発行されていますが、ここにも周旋人にあたる「周旋員」という語が記載されています。私が所蔵しているこの記念証は四八〇四五号と記載されています。近世の参宮数の比にはなりません、この番号からみても結構な人数が参宮して三日市大夫からの伊勢参宮記念証を貰っていたということになります。

先ほど小林先生が、三日市大夫が秩父に行っていたという話がありました。実は、この三日市大夫の記念証の裏側をみますと、名前は伏せますが当時、埼玉県秩父郡にお住まいの方の名前が記されています。明治二十七年三月九日参拝とあります。この参宮記念証が発行された時期は御師制度が廃されてから既に二十年以上を経過しています。ある意味、旧御

師となって活動としては伊勢の神宮とは直接の関係を切り離されていますが、いまだ旧師職として、檀家らとの間でつながりを保持していたということであると思われます。

こうした旧師職と檀家との関係性の転機、はつきりと変わっていく時期は明治四十年ぐらいからです。財団法人神宮奉斎会が明治三十二年に設立して活動を開始してようやく軌道に乗り始めた頃ですね。それまでの神宮教の時代には、明治二十年代にお伊勢さん御鎮座千九百年や第五十六回の遷宮（明治二十二年）もあり、あまり目くじらを立てていなかったことが、次の遷宮もあり、「これはちょっとおかしいぞ」という話になってきます。旧師職の活動に対して種々の問題が惹起してくるのがこの明治四十年代ですね。先ほどの八幡先生のお話とも関わってくるようです。

明治四十一年に出された神宮奉斎会京都本部の資料では、明治四十一年七月から十月にかけて、伊勢の参宮関連の団体に対して周旋行為を取り締まる文書が出されています。神宮奉斎会京都本部の名前で出されていて、伊勢に拠点をおく各団体の周旋行為に対して、こうした行為は問題があるので今後はやめて欲しいと書かれています。その中に三日市大夫も含めて具体的に幾つかの教会や、旧御師にも関わる色々な団体の名称が出てまいります。神宮の参拝、神楽、祈祷の請求、神符守札の請負、こういったものの代理・周旋行為を

禁止されたいということがこの文書にて神宮奉斎会から請求されているわけです。

ですので、御師が廃絶した以後も昭和初期まで何かしらの代理周旋活動が継続していたということですね。先ほど中川采女家の話が登場しましたけれども、当時配布されていた伊勢参宮地図の一種には、昭和初期のものですけれども、地図の裏側を見ると確かに「中川采女」という名称と「九州参宮本部」という名前があります。そういう意味では、全てではありませんが、旧師職においても何かしらの伊勢参宮にかかわる活動が、昭和初期までは継続してなされていたということは確実にいえるわけで絵葉書などにも中川采女や岩井田右近らが経営していた神洲館の写真が残されています。

先ほど、小林先生の話にもありましたように、伊勢講の講社が参宮に徒歩でというお話がありました。神風講社の宿帳なども残されていますが、先ほどは明治中期以降に徒歩から鉄道へと転換していくという話もありましたが、同じ時期に関東、東京、横浜など首都圏では船を使つての参宮もあつたと思われまふ。実際に神風講社や真誠講の宿を記した明治初期の宿帳にも蒸気船を記した絵が登場していますし、無論、旧東海道を使つての徒歩での参宮もあります。こうした道中安全と記された宿帳には、各道中の講社が利用できる宿が書かれていて、こういったところにも当時の参宮の様相を窺い

知ることができます。

それから、明治二十年代といえますと、先程少し触れましたが、お伊勢さん鎮座千九百年に向けた参宮運動が活発な時期です。ちなみに二千年は平成八年でした。この時代は、神宮教でも大々的に、御鎮座千九百年で、奉祝会員を集めて参宮促進を図るチラシやチケットなどを出しています。チラシの裏側を見ますと、実は奉祝会員には、いろいろな形で特典があつて、例えば「拝観之證」ということで御祈願もしますし、神宮教の伊勢大本院で御祓も致します。さらには御神楽も奉奏しますし、時雍館で御宝物の拝観をしますと。時雍館は元々、神宮教院の一部で、今の内宮の神楽殿の付近にあつたとされていますが、この辺は後で窪寺さんにもお話を聞きたいと思っています。

神宮御鎮座千九百年の際には、神宮教では、参拝する奉祝会員に「祭符」と言うんでしょうか、小さなお札も頒布しています。赤い神符です。「千九百年奉祝祭符」という名称でチラシや拝観證とともに入っていました。今お見せしているのは、長野県内の神宮教上田本部で発行されていたものですが、奉祝会に会員として参加した人たちに、この赤いお守りを頒布していたということです。

神宮教は、神宮教院と神宮司庁が分離した明治十五年以降の話ですので、伊勢の神宮から切り離された教派神道の一派

としての時代の活動ではあるのですが、近代における伊勢信仰ということを見ると、神宮奉斎会や現在の東京大神宮などの系譜にもつながる問題であり、伊勢信仰を語る上で捨て置けない話題の一つということもありますので、今日の本筋とは少し外れるかも知れませんが、少し紹介させて戴いた次第です。

それでは、再び各先生方にお伺いしていきたいと思います。先ほど小林先生のお話にもあったように、伊勢への参宮講が組まれて、近代においてもいろいろな記念碑も残されているということですが、櫻井先生のお話や八幡先生のお話にもつながりますが、御師を通じて大々的に伊勢神宮に参拝されていくのが近世なんです、そもそも中世の後期あたりには、そういう参宮行動の萌芽のようなものはあるんでしょうか。ただ神札を受けるだけなんでしょうか。

窪寺 資料の傾向というのがあって。少し前にお話がありました、道中日記的なものが残っている人たちの資料があります。例えば、戦国時代から江戸初期にかけて、中国大名の毛利氏の家臣で玉木吉保という人物がいます。彼の自叙伝に『身自鏡』（みのかがみ）というのがあります。

櫻井 確か医師でもあった人物ですね。

窪寺 はい。その人が、天正九年七月に伊勢までお参りに見えるんですけども、その途中、姫路あたりで、因幡の鳥

取城を攻めるために進軍していた秀吉軍を横目で見ながら、お伊勢参りをしてきたという人です。武士の自叙伝なので、また少し話が違いかもしれませんが。

あとは、講に特化しての資料というと、中世のところではあまりよく分からないですね。先ほど触れました御師の人たちが各地で配った、「御祓賦帳」には村単位で大体記載されています。その中には講親、講元、宿元などの記述がありまので、多分、講を組織していたんだろうということは考えられます。

中世末期の「御祓賦帳」には中国から九州地方にかけて橋村大夫のものが残っています。史料的に地域に偏りがあるのですが、特に九州が資料の残存が多いのです。奈良の天理図書館が所蔵する資料は、先年『佐賀県近世史料』に翻刻されました。神宮文庫にも写本があります。橋村大夫の享禄・永禄・元亀・天正の「中国九州御祓賦帳」、慶長十四年の「九州御祓賦帳」というのがありますね。

藤本 享禄年間だと室町幕府でいえば、第十二代の足利義晴ですので、戦国時代とはいってもそれなりに遡れますね。慶長だと戦国末期から江戸初期あたりですね。

窪寺 そうですね。関東の方では、実は御祓賦帳というのがあまり残っていないのですが、その理由はわかりません。

藤本 逆に言うと、西日本にはちゃんと記録が残存してい

るんですね。

窪寺 先ほど、福岡県に参宮奉納絵馬が沢山残っているという話もあったように伊勢信仰に関する記録資料としてはやはり九州が一番多いですね。橋村大夫、つまり御師の家に残っているケースがあります。既に何度も登場していますが、橋村肥前大夫ですね。

藤本 そうですね、橋村肥前大夫。

窪寺 その橋村肥前大夫に関する資料が、神宮文庫にも所蔵されていて、江戸時代の終わりから明治三十年代ぐらいまでの宿帳があります。先ほどの中川采女の宿帳のようになっています、それを見ますと、今の福岡県と大分県、豊前と筑前、あとは筑後にわたる地域の人々が参宮しています。二人からスタートして十人とか、二十人という団体で参宮を行っている実態が見えてきます。そういった資料が残されていますね。

藤本 講の話は熊野講など中世から語られますが、じゃ具体的に組織だつて何をしたのかとなると、いろいろなプロセスを経てきているので、どの時代からいわゆる目に見える形にと言ったら何ですけれども、地域の人たちとの関わりの中での講の活動が目に見えてくるんだろうというところがちよっと気になったもので窪寺先生にお尋ねした次第です。

次に櫻井先生にお伺いしたいのですが、小林先生の話のな

かで、絵馬の話が少し出てきました。先だつて東京の板橋区内の神社に伊勢の参宮関連の奉納絵馬の話があると仰っていました、そのお話を少しお願い致します。

櫻井 そうですね、資料をお見せするのを忘れていました。画面を共有しますので、少しお待ちください。

明治初年の師職の廃止のところで、先ほどお札について、神宮大麻のことは出ましたけれども、師職の神楽についても停止されたということを、少し補足させて戴きます。

これが有名な明治四年の太政官達、御師活動の停止を命じたものですが、師職・檀家と称して御祓大麻を配ることをしてはならないという内容ですね。では、これは誰を対象としたお達しかといったら、神宮の神官なのです。ですから伊勢の町の人に対するものではない。市中の民に対して直接出された達ではありません。しかしこれが大きな影響となり、師職家に勤めていた多くの人々が仕事を失うことになるのです。

これにつづいて、神宮への布達では、神楽と称して私邸において祈願をする、それから子良館において神楽をやっていることは駄目だということになります。新たに神宮の方では祈願と神楽を行う施設を設け、後に神楽殿と呼ばれますが、そこで奉奏される神楽については京都の雅楽局で伝習を受けた舞楽と少女の倭舞が導入されます。この点については、兵



熊野神社の奉納絵馬（寛政7年・東京都板橋区）

庫島の廣田神社禰宜の嶋津宣史さんが書かれた論文等もありますね。こういう形で、旧来の御師邸で行われていた神楽が全く行われなくなるわけです。

そういう観点から、一体、神楽はどのような意義をもつものであったのかと思つて探っていましたら、東京都の板橋区に志村熊野神社の絵馬、江戸後期の寛政七年の絵馬のもので、その絵馬の中央には神楽の座が描かれていて、そして神楽師さん、そして一番後ろに祈願をする願人たちがいるような絵馬です。

ただし、神楽を描いた絵馬というのは、先ほど小林さんが仰っていたように江戸後期からのものが大半で数は少ない。幾つか見たら、明治期になつてからものが多いのかなという気も致しました。今画面共有しているのは、加須市の八坂大神社という神社の絵馬ですが、これも明治期に描かれたものです。

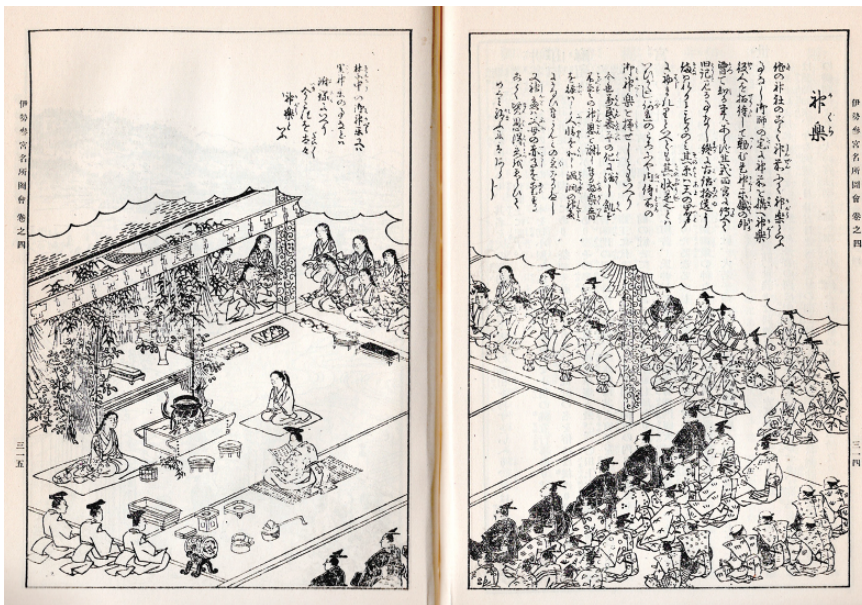
御師の神楽に関しては、どこで行われていたか調べているのですが、神楽殿を持つていた御師は少ない。この画像は子良館のものです。ここでも神楽をやっています。それと少し不思議なのですが、外宮の高倉山には天岩戸と呼ばれる所があり、そこでも神楽をやっているような絵も見られるんです。『伊勢参宮名所図会』に高倉山の図の中に神楽殿、茶屋が描かれています。それから、これは慶光院。ここに神楽金が描

かれています。これは岡田弁財天社というのですが、今の祭主職舎にあたる旧慶光院の建物の横、五十鈴川郵便局のあたりに弁天社があった。神宮さんが活字化された「禁裏御願御神楽之記」(増補大神宮叢書23『神宮近世奉養拾要 前篇』所収)ですね。この「禁裏御願御神楽之記」に絵が描かれていて、ここに記されている湯釜が慶光院の湯釜とよく似ているのです。ちよつと不思議ですね。神楽というと『伊勢参宮名所図会』の神楽図が取り上げられることが多いですけど、『禁裏御願御神楽之記』のような屋外でのパターンも見受けられます。

画像の中、これが神座です。それから、神楽師さんと舞の巫女たち。女子が中心で、舞と湯立をして。楽は男たちが担っています。次の図もそうです。願主さんはここに三名座っているだけなんです。

こうした図は『伊勢参宮名所図会』などでも見るんですが、実際の参宮の奉納絵馬ではまだまだ探せていないんです。これがなぜかというのが少し気になるところでして、あるいはどういう絵が描かれるのかというのは、『伊勢参宮名所図会』などを一つの手本として描いたのかという気がしています。

いずれにしても、こうやって御神楽の様子を絵馬に描く、あるいは御神楽を上げましたということを大きく表示して神社に奉納しているような絵馬の例を見ますと、伊勢神宮への



『伊勢参宮名所図会』の神楽の図

参拝に関しては、御神楽を上げるといいうのは、すごく大事な伝統となっていたのではないか。御師の私邸で行われていたけれども、それを近代になって神宮当局が神楽殿を構えて担われていくわけですが、神宮大麻の授与や頒布とともに、参宮に來た人たちが御神楽を上げての参拝というものの、これが重要な参拝の仕方としてなされていく。御師の時代では大神楽をあげる参宮者は費用に余裕がないと難しく、必ずしも多くない。しかし、近代になり、御神楽の奉奏が行いやすくなった。大々御神楽まで無理だけど、御饌だけでも奉つて、奉賛させていただくという形もあります。

今ではどうでしょうか。こうした御神楽をあげることがあまり意識されず、神前で手を合わせてすぐ退出する参拝となってしまう点に、もう少しこれまでの参宮のあり方を振り返り検討していく必要があるのではないかと思います。

藤本 櫻井先生、有難うございます。確かに神域で授与されるいわゆる授与大麻にも、神楽大麻、御饌大麻というように、純粹な区分けとはいかないまでも神札の種類を示す名称としてはありますし、そういう意味では、先ほどのお話は重要な指摘だと思います。

この点について、窪寺先生から補足がありますでしょうか。八幡先生にも少しお伺いしようと思ったんですけど。

窪寺

今の『伊勢参宮名所図会』の神楽の図は有名な絵ですね。『伊勢参宮名所図会』全八冊は現在のガイドブックに相当する書物です。道中携行するには大きいサイズの本ですから、旅立つ前に道中の名所・旧跡・橋梁・宿場などについて下調べに役立てたのだらうといわれています。先ほどの神楽の図から御師邸での大々神楽の様子を想像したと思います。今、画面共有された神楽の図は彩色が施された掛け軸と思うのですが、恐らくお土産用のお品ではないかと思われます。

それはなぜかといえば、両方の構図と大体似たようなものが神宮文庫にもあります。一例をあげれば、江戸時代後期の木版刷りの神楽の図の掛け軸がありまして、その図に荒祭宮の物忌父をしていた泉舎善（いえよし）という人物が神楽の縁起を記しています。御祓銘を泉館大夫といつて宇治に住んでいました。おそらく檀家に渡したものと思われます。

櫻井 先ほど藤本先生が見せていた「伊勢大廟参拝記念」の絵、上部に神楽を上げていた絵のパターンを見せていただきますか。

藤本 これですね。

窪寺 そうですね。

櫻井 有難うございます。

窪寺 今、藤本先生がお持ちの絵につながる前段階として、



伊勢大廟参拝記念絵図（昭和11年）

御師たちはどうも、御神楽はこのようなものですという一枚刷りのものを用意していたようです。そこには神楽の起源というものの、つまり、先ほどの泉館大夫が書いたものを一緒に渡していたらしいんです。

先ほど櫻井先生がおっしゃったように、明治期になると御師邸で行われていた御神楽の奏行は停止となります。それに代わって神宮の宮域内に神楽殿を設けて、御祈願をするという形になりました。

そうしたときに、今、藤本先生にお示し戴いたような、神楽殿で舞姫（巫女）や人長が舞っている様子を描いた錦絵（浮世絵）を伊勢の町の人たちが印刷出版するようになります。

櫻井 今、画面共有で見てもらっているものは今のお話に関係していますね。

窪寺 そうですね。

櫻井 これは「内宮御神楽図并起源」とあるのですね。江戸時代の様子を描いたものと分かるのは、図の中に「ヤマ」と読んだり、「ヒモロギ」と読む箇所がありますね。ここに米俵が置いてあります。それから、柱を錦で巻いてあるのです。こういう場面は近代の神楽殿での御神楽よりも古い形です。湯立釜がここにある。舞姫さんたちはここにいて、本当はこの奥にも人がいるのですけれど、この辺りが皆さん方、神楽師さんたちです。

これは版木で刷つてあるのです。多分、配ったのかなという。お土産用で。

窪寺 そうですね。

藤本 近代に入るとこう変わっていくんだと思いますね。

今画面共有しているのが明治十四年の絵図です。これは、同じ御神楽でも多分、御師の私邸でのもから神楽殿の中でのものに変わっています。また、もう一つは明治三十年三月に、先ほど窪寺さんの話にありましたが御土産物というか、当時、刷つて頒布していたものだと思いますが、明治三十年ですと前年の明治二十九年がお伊勢さん御鎮座千九百年でしたので、この時期に合わせて、お参りする方ということ、地元で発行されていたものだと思います。

やはり御神楽の絵図は、何か象徴的なものですね。先ほど、御師の私邸でやっていた神楽が明治以後に変わっていくというの、絵馬や刷り物などについても絵柄が、宮域にある神楽殿の御神楽に変わっていつているというのは面白いですね。

櫻井 そうだね。

藤本 こういう絵の系統は二通りあって、一つは、摂末社の巡拝の地図のようなものと、もう一方は、先ほどお示ししたような御神楽が掲載された絵図です。

それが、先ほど言ったように、伊勢の同じ名所でも、お伊

勢さんの地図と各別宮さんや摂末社の祭神などを出したものの、先ほどお見せしたような参拝記念の土産物の絵図で、神楽もやっているとところも上部にはあるけれども、伊勢の地元のいろいろな名所、徴古館や伊勢音頭、遷宮の図であったり、そういうものを織り交ぜたような絵柄に変わっていくんですね。

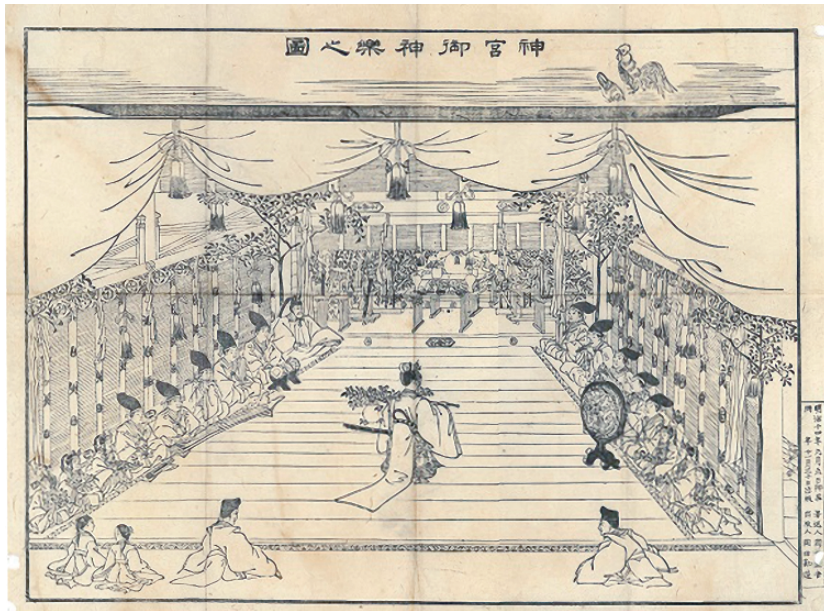
時代が下るとさらに、そこにだんだん、駅からの距離、何分かかるとか、何時の汽車でという記載が出てくるようになってきます。さらに地図も近代的な地図に変わっていくというか、鉄道案内のような感じに変わっていきますね。聞きしながら思っていた次第です。

もう少しさらにお伺いしてみたいと思います。八幡先生、何か、岩井田家のことなども含めていかがでしょうか。

八幡 岩井田家の資料の中には、明治期の御師の廃絶の後もずっと継続して、先ほど櫻井先生の資料にありました、岡部さんでしたか、いますね。

櫻井 岡部新七ですね。

八幡 新七さん。この人が後々までも、あれは明治二十九年の史料ですが、その辺りまでは追っていただけるので、同じように伊勢講の人たち、旧檀那の人たちには様々なサポート、ケアをしていました。それで、江戸時代のように御祓大麻、神札は出せないで、社頭で授与大麻を受けてその神札をそ



神宮御神楽之図（明治14年）

それぞれの講元へ送っていたという記録があります。

そのときに、埼玉県の場合は早いうちから新しく伊勢講の講社を編成し直すということが岩井田家の資料の中から窺うことができます。

岩井田家の資料の中で「東国敬神会の結集大意」という史料があります。これは今の加須市で明治十三年です。その中に、やはり講社のなかで予算立てがしつかりとなされていて、お札料も御神楽料も初めから織り込み済みです。それで、一つの講社としては三百六十五人が一単位会となっています。そして伊勢に居る代参人が毎日、伊勢両宮を参拝して、授与大麻をそれぞれ一体ずつ受けてきて、それを纏めて講社員に配布するという形式をとっていた時期があったことが岩井田家の資料から分かります。

それと、御神楽については、旧御師についての補償、つまり御師活動を廃止させられたということもあり、旧檀家さんが伊勢に来た時に神宮神域内での神楽を旧御師が幹旋し、その仲介手数料が神宮から入るということが岩井田家の資料の中にはあります。いつまでなされていたかは分かりませんが、明治後期にはそうした神楽の幹旋行為がなくなっています。恐らく、岩井田家のように元御師の中にはひきつづき講組織を再編するとともに、宿泊業もかね、そして御神楽の幹旋なども続けていたと考えられます。

伊勢大參宮會廣告
 今年、伊勢おかけ參（付神宮教院、日本郵船會社、日本郵船會社）の間に、特約を締むる伊勢會社員に限り、横濱四日市との間往來の二割引即ち一圓廿錢にて御乘船、或は成候右の會引無代にて太々神樂所、大所等、の御拜見、出立、御物賣、に勿論、其會引無代、東京、神宮教院、に勿論、横濱大參宮會出張所より出會費、一人金三十錢を納むる也。
 日本郵船會社の船、毎日午後二時出帆、其翌日、即達、本伊勢會社の船、毎日午後日本郵船會社の船、第一、堅固の大船にて、風波の爲め、勘配せられ、又延びることをなけれ、御安心の上、御乗船被下度候。
 横濱日本郵船會社、船客取次旅人宿、一同、右所成候の通に、付會引一同、入會者、御掛念無き、乘船、有、右所成候、有、定宿、一同、店頭に、伊勢大參宮會の、庶事を、掲げ、あれ、ば、之を、目印、として、休泊、及び、乘船、せらる、べし。
 横濱神天宮、伊勢大參宮會、横濱出張所

社との間に特約を締り、参會會員に限り横濱四日会館の便所を二割引一圓廿錢にて大々増徴せしめ、御座る相成候者の會員無代にて大々増徴せしめ、黒毛所附する三ヶ所の會員は勿論増徴せず。又、來大神宮の古蹟野見山へ大神宮敎院(勿論其會費)を東京へ出張張所とす。其會議員一人三十歳を納むる也。
日本神祇船客の輪が毎日より午五時出帆其翌日問途なく伊勢参詣の船が、近日より日本郵船公司の「船」第一號國の大船にて風波の爲め遅れず又延着することなれば、御安心の上御乗給被下度候。

橫濱 日本郵船 船客取次旅人宿一同
右船相成候通付會同及ハ唐人會館參事會同乘船相成候有定宿一同ハ店頭に伊勢大參金會の旗幟を掲げられべ之を目としして休泊及び乘船せらるべし。

續演説天竺經 勢大參宮院伊勢大神宮橫濱出張所

廣 告

一 設田港より
二 設田港より
三 設田港より
四 設田港より
五 設田港より
六 設田港より
七 設田港より
八 設田港より
九 設田港より
十 設田港より

伊勢大寺宮寄附金 大參宮會事務係
伊勢大寺宮寄附金 大參宮會事務係
伊勢大寺宮寄附金 大參宮會事務係
伊勢大寺宮寄附金 大參宮會事務係
伊勢大寺宮寄附金 大參宮會事務係
伊勢大寺宮寄附金 大參宮會事務係
伊勢大寺宮寄附金 大參宮會事務係
伊勢大寺宮寄附金 大參宮會事務係
伊勢大寺宮寄附金 大參宮會事務係
伊勢大寺宮寄附金 大參宮會事務係

明治三十三年一月
明治三十三年一月
明治三十三年一月
明治三十三年一月
明治三十三年一月
明治三十三年一月
明治三十三年一月
明治三十三年一月
明治三十三年一月
明治三十三年一月

大參宮會事務係

[illegible]

藤本 有難うございます。先ほども申し上げたのですが、私自身は旧御師の幹旋活動が変わる起点というのが、明治三十年代から四十年代にかけてであると考えています。とくに明治二十年代の伊勢神宮御鎮座の千九百年の奉祝の参宮運動あたりまでは、まだ、神宮や神宮奉斎会の方も幾分、周旋活動を許容していたと思います。

先ほど、小林先生の話にもあったんですが、今、画面共有しているこちら

この時期というのは、明治二十三年ですから、明治二年の式年遷宮の次の遷宮の頃です。そこから明治二十九年のお伊勢さん御鎮座千九百年があつて、その後、明治四十二年代のの式年遷宮というのは、これは阪本是丸先生がよく仰つていましたが、明治四十二年の神宮式年遷宮は国家として、かなり確固たる形で官制での式年遷宮の体制を固めて行うようになつた遷宮ですね。私はこの明治四十二年の遷宮に合わせて、今までの旧御師などの活動も変わつてくる起点になつてくる時期にあたるかと考えています。その十年前に教派神道の神宮



藤本 頼生 氏

教から祭祀法人である財団法人神宮奉斎会へと変わっていく時期とも重なり合うということで、神宮教から神宮奉斎会に変わっていくという時期でもありますし、そういう意味でちょうど、旧師職においても今まで通りのような周旋活動とはいかなくて、お伊勢参りに関しても色々な物事が変わっていく時期なのかなと考えております。

また、先ほどの御鎮座千九百年の奉祝祭のときにもやはり同じように、鉄道の割引がありました。お見せしている資料には官線と書かれています。昭和という国鉄、今というJRだと思えますが、日本鉄道、両毛鉄道、武甲鉄道、総武鉄道、青梅鉄道、これら鉄道の割引も登場致します。特に神宮教院の関係でいくと、割引に加えて色々な特典を出しますよと記されています。鉄道を使う特典がいっぱい付加されて

いますよとあります。それから、先ほど出たような神宮教院の祭符や特典の証券、それから汽車割引、勘合証を渡せば、伊勢でこういったことができますよとい

うことも書かれています。先ほど見せたような、勘合証を見せることで色々な割引や特典があるということがわかります。

伊勢までの鉄道の敷設がさらに発展してゆくと、いわゆる現在でいうところの小・中・高校の学校の修学旅行なども含めてですが、お伊勢参りのための案内パンフレットなども発達します。例えば、『少年少女（電車）の旅』というものもそうですけれども、神都の案内、先ほど見せましたが、どんどん変わっていきます。特に地図的なものも多くて『伊勢参宮案内』、『神都案内』、『参宮案内』といった名称の小冊子、地図類が市や民間団体から沢山発行されています。

こちらは神宮神部署が出したもので『神宮奉賽の志を里』というパンフレットです。时期的には大正から昭和初期に発行されたものです。中身を読むと面白くて、単に司庁が出した神宮参拝の心得ではなくて、頒布大麻についての心得なども書かれています。注意事項というのが一番後ろにあります。「神宮参拝講社組織の旨をもつて規則の送付を申し出さるる向きあるも、神宮においては右に関して特段の規定を設けなければ任意に定められたし。神宮においてははいかなる場合といえども寄付の勧誘、会員の募集をなすことはない」ということが書かれています。神宮神部署が設置されてからのパンフレットですが、やはり神宮では、一般の講社組織とは

一線を画している部分が見受けられます。

その意味では、明治期までに築かれていた神宮と旧師職の師檀関係のあり方は変化してきており、時期が下つてくると、より現在に近い形に近づいていくという側面が窺えると思います。

八幡 旧御師が今まで抱えていた講であるとか、そういうものから民間のいろいろな奉賛会のようなものが沢山発会しますね。

藤本 そうですね。三日市大夫などもそうですが、よくわからない団体なども含めてですが、発会していますね。

八幡 それで、いろいろな注意が出されたり、あとは宿間の客の囲い込みなどが激しくなります。皇學館大学の谷口先生が調査された、伊勢の旧御師の旅館業であるとかもそうですね。その意味では本当に、旧御師がやっていたものがほとんど時代が下つていくと、御師以外の民間からの参入で壊れてしまい、廃業してゆきます。

藤本 そうですね。旧御師の家で出されていた特別頒布の御札のようなものも、昭和の初めには終焉を迎えて変わっていきますし、時代が下るほど御師の廃業も相次ぎ、旧来の制度が壊れていくというのか、変化していきますね。

八幡 例えば、その一端としては、岩井田家の資料の中に、今まで自分たちが出していた神札と頒布大麻の違いについて

の質問に、丁寧に答えるということをしていたという資料が残っています。

藤本 やはりそういったものもあるんですね。ある意味、今の頒布大麻の説明の参考にもなりそうですね。

八幡 昭和二年に神宮奉斎会に代わって全国神職会が神宮大麻を全国頒布することになったことで、それまで旧師職が社頭の授与大麻を受けて送っていたのが大分減ってきます。その辺りの資料が、岩井田家の資料の中には少し残っていました。

藤本 その意味では、昭和二年に神宮奉斎会から、全国神職会による神宮大麻の頒布が開始されていくことは、一つの起点になるでしょうね。

八幡 そうですね。

藤本 小林先生に、先ほどは埼玉県内の伊勢講の話をお伺いしましたが、近現代の伊勢信仰の問題を語るときに、神宮への奉賛という問題があります。その問題を考えたときに、戦後は東京大神宮を中心に伊勢神宮講社が出来たりもしましたし、稀代の敬神家として知られた小石川大神宮の佐佐木勝造氏のような事例もあります。戦後の伊勢の参宮運動や講碑の話から、特に時代が下つてくるにつれて講碑が増えてくるという話もありました。埼玉県事例で結構ですが、伊勢の奉賛に尽くした人物について小林先生が調べられていると

伺ったものですから、そのお話をして戴ければ、伊勢信仰のまた違った現代的な側面も出てくるのかなと思っています。ぜひ、一例を御紹介戴ければと思います。

小林 私自身の視点として、埼玉県内、あるいは自分の地元の越谷市という地域を軸にモノを見ている部分があります。当然、自身が埼玉県内で神主をしているからであります。そういう意味ではあまり視野は広くないかも知れません。戦後の話で自分が少し調べたものもあるんですが、その前段階からお話しさせて戴きます。

まず、神宮の参宮記念の石碑の数が増えていく傾向をグラフにしたものがありまして、画面に共有させて戴きます。

グラフの縦の軸になっていているものが、石碑の数です。黄色とオレンジのグラフは、黄色が神宮の参拝者数で、右側に数字を取っているものです。オレンジ色が神宮大麻ですけれども、これを見ていくと、明治以前は、本当にポツ、ポツとししか石碑の建立がありません。明治二十年代になって、多少の波はありますが、少しずつ右肩上がりに建立の数が増加していきます。所々、大きくグラフが上がるころがあります。これが、大正十一年と昭和九年です。大正十一年は何故こうなっているのか理由がよく分かりません。ただし、どちらも戊年です。どうしてこの戊年に参宮碑の建立が増加するのか、よく分からないというのが正直なところですが、時代ごとの

建立数では目立つ箇所です。

当然、先の大戦に近接した時期には、神社に石碑などを建てる余力がなくなっており、昭和十七年、十八年はグラフの伸びも小さくなっています。ただ、昭和二十年以降も少しだけですが参宮碑が建立されています。一基、二基は建立されています。その後、サンフランシスコ講和条約が締結される時期になると建立数が再び増加してきます。

さらに戦後、一時期は年間四十基くらいまで増加していますが、それから多く建立されることはなく、昭和四十八、九年、つまり第六十回、戦後二回目の神宮式年遷宮に建立がみられます。第六十一回の式年遷宮の時期にあたる平成五年、六年という頃に再び波がきますが、石碑の建立数は多くありません。

藤本 この昭和三十三年も戊年じゃないでしょうか。

小林 何故か、戊年の建立が多いんです。

藤本 昭和二十一年は戊年でも時期的に参宮碑の建立は無理かなと思つたんですが、昭和九年の後の戊年という昭和二十一年、その次の戊年は昭和三十三年ですので、三十三年が突出しているんですね。

小林 確かにこの年は増加しています。

藤本 次の戊年にあたる昭和四十五年は少しだけ多いですが、四十一年ほどでなく突出してはいない。その辺りになる

と昭和四十八年の第六十回の式年遷宮に近い時期ですが、どちらかといえば、参宮への思いも現代的になってくるのかなという気もみえますね。

小林 そうですね。

藤本 戌年なのは何故か。明治四十三年も戌年で、この年も建立数が四十あって、突出していますね。ちょうど、第五十七回の遷宮が終わった後です。この次が大正十一年ですね。ここは百十一基、昭和九年に次ぐ多さですね。

小林 確かにその通りなんです、戌年で増える理由がよく分からない。色々な書物を見ても自分では調べ当たらなかったこともあって、この戌年についての分析はあまり強調していないんです。

藤本 しかしながら、戌年の増加というのは面白いというか、何か興味深いところがありそうな感覚もしますね。

小林 もし何か御存知でしたら、ご教示戴ければ有難いです。戦後の混乱期に尽力した人物についてであります、昭和二十七〜九年ぐらいから参宮碑の建立が回復してくるような様子をつくった人物というのが、私の地元、越谷の方です。大野伊右衛門という方で、手前味噌のようで恐縮ですが、地元の方ですので当社の宮司も、久伊豆神社には大野伊右衛門さんという有名な総代さんがいて、その方がいたから神社の今があるんだという話をよくしているので、私にとっては

ごく親しみがある人物です。

この大野さんは、戦前からかなり熱心に神宮を崇敬されていた篤信家、敬神家です。戦後、神社本庁の発足後は、総代ではありましたが、本庁評議員会の評議員になられて、神宮式年遷宮が神道指令などの影響で途中で止まっている状況を危惧して、「国民皆が伊勢に参宮すれば、式年遷宮をすることができないのではないか」と言った方なんだと若い頃から教わっていました。

でも、この話はあくまで口伝でしか聞いていない話でしたので、本当に根拠がある話なんだろうかと思つて大野さんの実績を調べたりしていました。あるいは、現在、久伊豆神社の責任役員である大野光政氏のご自宅にある資料を頂戴して調べておきますと、大野伊右衛門宛の高倉篤麿神宮大宮司からの感謝のお手紙などが出てきて、神宮当局と大野伊右衛門との関わりが本当だったというのが少しずつ分かってきました。そのような経緯で大野伊右衛門の業績を書いたという次第です。

大野伊右衛門は、先ほどの写真でも分かるとおり、戦後、第五十九回の神宮式年遷宮で活躍をされました。

先ほども、藤本先生から明治期の参宮促進運動では、船での参宮について神宮教院が日本郵船とタイアップしたという話が出ていたかと思うのですが、大野伊右衛門の出身学校は



大野伊右衛門

春日部高
校でし
て、その
同窓生に
衆議院議
員で運輸
政務次官
を務めた
新井堯爾

という方がいました。新井堯爾は日本観光の父と言われる人物で、今のJTBの前身にあたる日本交通公社を設立して理事長に就任したり、その前は鉄道官僚として鉄道院で国際観光局長や運輸局長として活躍をされていた方でした。その新井堯爾と大野伊右衛門は仲が良く、一緒になって当時は廃れていた、戦後でどうなるか分からない状況だった伊勢講を、もう一度、埼玉県で大きく復興するんだと言って、大参宮団を結成して伊勢神宮に参宮を行いました。地元でそうした講の再興などの活躍をする一方で、伊勢神宮の式年遷宮奉賛会でも一生懸命活動されていたことが評価されて、昭和二十八年の第五十九回の神宮式年遷宮では冠、黒袍を着衣して遷御の儀に供奉する荣誉に預かりました。今画面に共有しているのは神宮の齋館の前で大野が写真を撮ったものです。

伊勢信仰とその講の役割、神職の役割というところでは、大野伊右衛門は、伊勢講をもう一回結成し直して伊勢に皆でお参りするんだと提唱する訳ですが、伊勢神宮奉賛会を財団法人として設立して、神宮を奉賛する財団法人を神宮の方で常時で持っている様になります。大野が頑張って結成した戦後の伊勢講は、組織の機能的には他の団体と重複しているところがあつて、結果的には昭和三十年代を最後に活動はなくなりしました。そこから伊勢神宮奉賛会の埼玉県本部へと移行していった形跡が資料上は見つかっていないので、戦後の埼玉の伊勢講はうまく機能しなかったのではないかと思つているところであります。

藤本 私も東京大神宮の終戦間もない時期のことを調べていたときに、同様に昭和三十年代までは伊勢神宮講社、東京大神宮でも財団法人伊勢神宮講社を設立して事務局を置いて伊勢講の活性化、再結成をやろうとします。実際には足立区内に支部が結成されたりしますが、やはり昭和三十年代の途中までは記録が出てきます。その後はやはりパタリと活動の様子が見られなくなつて結果解散します。ですので、小林先生が仰つていたような事象は、地域を問わず同じ傾向を示しているのだと考えています。

ちょうど高度経済成長期とも重なる時代でもありますし、そのなかで廃れてしまったものなのか。あるいは、ほかの講

社のことも含めて同様の傾向があるか否かという問題も考えなければならぬ。ある意味、人々の暮らしが都会的、現代的になっていく過程のなかで講の在り方や運営のやり方が行き詰まってしまったのではという側面もあるかと思うんです。

現代的な問題、つまり今後の伊勢信仰のあり方を考える上では、戦後、GHQによる占領が解けた後に参宮碑の建立も増加に転じて、その後また、遷宮の前後にぽつぽつと建立の山が来るといふ、こういう事象をどう捉えるか。私も、川崎市内の参宮講碑を地道に調べているんですが、多く出てくるのは、伊勢神宮の式年遷宮に合わせての記念碑なんです。昭和四十八年や平成五年、それから前回の平成二十五年の式年遷宮に併せて境内に建立されているものが多い。それ以前、戦前から戦後の昭和三十年代ぐらいの埼玉県内のような建立の波とはやや少し何か違っており、同じ関東でも神奈川県では伊勢信仰の様相は少々異なるのではないかという感触もありますね。

それでは、オブザーバーとして岡市さんから、今までのお話を聞いていて、何か、各先生方に尋ねてみたいことなどありますでしょうか。

岡市 伊勢の御師から始まる、中世、近世、近代と、お話を伺いまして、私は立場上、神社本庁の人間として、そこに



岡市 仁志 氏

神職がどのように関わってきたのかと聞いたことが、今、お話を聞いていまして少し気になっておりました。

参宮講ということとで記念碑を建立して、それぞれの氏子

さんたちがずっと、歴史を通じて参宮を行ってきたというお話、非常に興味深いのですが、明治期以降、当然、明治四十年代の遷宮から神宮奉斎会も関わって、そこが境になっていくんですが、そこに具体的に神職がどのように関わっていたのかということが疑問といえますか、興味を持ちました。

これはどの先生に質問すればいいのかは分からないんですけれども、そういった感想を持ちましたので、お尋ねしたいところです。

藤本 ご指摘は大事な視点の一つとして、今まで話の中には、勿論、登場した御師＝師職そのものが神職でもありますが、話の中に縷々登場してきた部分はあろうかと思うんですが、確かに御指摘の通り、神職の具体的な関与という側面としては、今日の話のなかでは、あまり強調されていなかった

たというのがあります。

それでは、伊勢信仰の今後を考えていくということで、各先生からもう一言ずつ頂戴して、そろそろ座談会の締めに入りたいと思います。櫻井先生、先ほどの岡市さんの指摘に対していかがでしょうか。

櫻井 これを一律に全国の神職さんの行動として捉えられるのか、先ほどからも少し課題になっている、それぞれの地域の特性というもので、神職の在り方、伊勢神宮に対する関わり方も違ってくる部分があるという印象を持つことがあります。

何故かという、八幡さんと北九州方面へ調査に行きましたら、伊勢の参宮講では、「同行（どうぎょう）」という表現が使われているんです。八幡さん、そうでしたね。

八幡 そうです。

櫻井 「同じ行く」と書いて「同行」。

これは、どなたかが発意して伊勢参りの同行を募ったと。それで伊勢参りに行ったら、それで一回きりで、二遍、三遍と伊勢へ行っていないという、そんな話を聞いたことがあります。

その代わり、近隣の英彦山神宮などへ皆さんでお参りに行ったりして、そこには、神職か否かは別として地域の中で呼びかけ人というような方々がいらつしやるということが

挙げられますね。

それから、もう一点、中川采女家の資料の分析を八幡さんが行った際に、ある集落ではお坊さんが中心になって参宮をしていた例を見い出されました。六十人ほどの大きな団体でしたが、中川采女家の資料には、地域神社の神職のお名前はなかなか出てこないと思います。これは地域の神社の神職が何もなくないということではなくて、呼びかけや引率という形が、個々の地域において、もう少し特別な要因がないかを含めて検証してみる必要があると言えます。

それがやがては、神宮の式年遷宮ごとに神社本庁が大きな力を発揮されて、遷宮の奉賛に向けて各神社庁とともに動いていける形が新たにできてきますと、今度はそういう仕組みの中で地域の神職も関わられていくようになりますが、それと、先ほどのような、旧来からの講の結成、参宮講と言うんですか、それと神社側主体のものがどこかで入れ替わるというようなことがあると思うのですね。

藤本 有難うございます。八幡先生、現任の宮司のお立場からいかがでしょうか。

八幡 やはり、地域には、伊勢講であるとか、いろいろな形で伊勢信仰が残っていると思います。今もそういう民俗が残っている場合もあります。それが講であつたり、地縁の小组や数十戸単位のコミュニティーで続けられているという

ころも、佐賀にはあります。

それと、戦後の場合ですと、神社本庁の本宗としての伊勢の神宮の信仰ですね。この一番の象徴は神宮大麻です。天照大神様を中心とした、神社界の本宗としての伊勢神宮を信仰するというのが、地域の伊勢信仰や伊勢講とイコールでつながっているんだろうかと感じています。

神社本庁の本宗としての伊勢神宮の信仰というのは、やはり国家管理時代の国民教化の一つとして、神道教化であるとか、伊勢を中心とした信仰体系の中でやはり国民教化を目指したときの大御璽としての神宮大麻だったと思うんです。

それが、戦後、宗教法人になった時代にどうやってそうした考え方を継承していくか、現任の神職としては、どのようにしていくのかと。天照大神様を中心にしたというのは、これはもちろん、それが日本神話の中で語られることでありますし、皇室の神宮崇敬が現代まで続いている一つの象徴なんです。地域には地域の伊勢信仰があつたりというところで、それぞれの考え方をどのようにこれから地域の人に意義づけて教化していくかというのはかなり難しいところがあります。

藤本 その意味でやはり、伊勢信仰の担い手としての神職の役割というのも非常に大事になってくると思いますね。

八幡 そうですね。

今、神職はどちらかというと、神宮大麻の頒布に一所懸命というところがありますが、そのバックボーン、社会的・歴史的背景にある、地域ですつと伝統的に守られていたような、そういう民俗信仰、神社信仰もやはり、神主として大切にしていかなければいけないのではないかとも思いました。

藤本 確かに地域の神社の神職というのは、お伊勢さんだけではなくて、八幡神社の宮司さんいれば、天満宮の宮司や住吉神社の宮司もいらつしやいます。神明社だけではありませんので、そういう中であつて、お伊勢さんの神宮大麻は、昭和二年からは、全国神職会を中心にして氏神社を通じて頒布している。戦後は神社本庁になって引き継がれて頒布されているということでもありますし、その点では神社の神職は、神宮大麻のこともやらなければいけないし、伊勢神宮の参宮促進のこともやらなければいけないし、それこそ地域に根づいている民俗信仰としての伊勢信仰や他の神社の信仰や山岳信仰などをどうするかという問題など、いろいろなことを神主さんが背負ってきている部分があると思います。

今日の話の中心は、そういう点も含めて色々な角度から見ているということでした。その中で神職さんが、実は陰ながら忍者のように色々な箇所伊勢信仰を支えてくれているんだけれども、そこがなかなか逆に見えづらくなつてしまつたのかという側面もあつたりしてとにかく見えにくい訳で

す。もちろん、そういったところも視野に入れながら、今回は座談会を行っている訳です。

そういう点でも現代の神職の持つ役割の多様性と言うんでしょうか。伊勢信仰を含む様々な神社信仰の担い手としての多面性、多様性というか、沢山持っている中で色々なことをやらなければいけない。勿論、自分の奉仕する神社の信仰のこともちゃんとしなければいけないという、本分を全うしつつやっているということですから、そういう意味では非常に、担い手としての難しさを背負いながらやっているのかなと、先ほどの岡市さんからのご指摘もあって、改めて今回、気づかされた側面もあると思います。

八幡 御師の時代、神主は宗教者としての役割をしていました。御師とはいつでも実際に地方へ信仰の伝播を担う役割を背負って行くのは手代で、どれだけの宗教活動をしていたかは分かりません。御師は各地からの参宮の旅の手配であったり、お札を配つたりという、信仰のサポートをする人たちがいた訳です。現代は、御師や手代が行っていた、旅行の手配から宗教者としての役割まで、広い範囲を、藤本先生がご指摘のように、神職はサポートしていかないといけない訳ですね。あまり俗っぽくなると、「神主さん、いろいろなことをやっていて何がしたいかわからない」という感じにもなるかなという気がします。だけれど、単なる宗教者、神職と

してだけの立場に固執すると地域の様々な社会的習俗、民俗などが少しおろそかになってしまふところもあるかなと感じました。

藤本 そうですね。神道教化という側面を考えると、神職はこの伊勢の神宮への信仰に関しては五種類くらいの役割を果たしていると神道教化概論の授業で話しているんですが、本当に様々な役割を担っているんですよ。先ほど八幡先生が仰った通り、参宮に関していえば、神職が総代らの参宮旅行ではツアーコンダクターの部分を担当しているけれど、一方で純粋な宗教者の部分も当然ありますし、実際に氏子・総代らを伊勢に連れていったりもしなければいけない。かつては、手代とか、いろいろな人たちがいて、ある程度、やってくれた部分もあるんだけど、今はそういう部分は、旅行業は旅行業で分化しているところもありますし。でも、あくまで旅行業はホテルや切符、バスなどの旅の手配だけですから、行く人々の「心」をつなぎ止める場所としては、神職さんが一番、ある意味、人々と神宮との結節点になる部分を担っています。ですので、そういう意味での難しさとか。近世や近代のようなかつての時代とは違う難しさを背負っているのかなという気がします。小林先生、どうですか、その辺りは。

小林 勿論、それぞれの立場で頑張って担っているところ

なんです(笑)。

先程の指摘に対して、奉仕神社の禰宜という立場以外に、埼玉県神道青年会の前会長という立場で申し上げるとするなら、『埼玉県の伊勢講』という書籍を作成したのは、県内でこういう学術的な調査をしようと声をかけますと、実際に集まれる青年神職は、全体の四分の一もいません。多分二〇%くらいの神職しか、集まっていなくて、ほかの八〇%の青年神職は、そういう調査活動には忙しくて来られないとか、そもそも声をかけても来てくれない方々が沢山いるんです。

でも、県内の神職仲間が集まって何かをする以上、自分の手元のことが忙しくて来られない人たちにも、結果、何か役に立つものも残さないといけない。県内で神職が集まって組織を作っている意味がないと思っています。自分たちが作ったものを見てもらったら、それぞれの地域にこういう伊勢の神宮の参詣に因む石碑があり、伊勢信仰が埼玉の地元に根付いてきたというのを理解して貰いたい。自分の場合は、地元には偉大な大野伊右衛門さんという大総代がいて、越谷と伊勢とは、こういうつながりがあるという話ができる訳ですが、埼玉県内の神職の一人一人が、地元と伊勢とのつながりをどのように話すかということが地元への神道教化、神宮大麻の頒布などにも必ずつながるはずですので、そのための資料になればと思つて作成したのが、この『埼玉県の伊勢講』とい

う書籍です。

本当に、神職の役割が難しいのは、学校などで習うことは異なった大事な部分を担わなければならない。今日のこの座談会のお話も本来であれば沢山の神職に聞いて貰いたいと思っています。興味のある神職が聞いたらすごく勉強になると思うんです。ただ、単に聞いただけの話を地元に戻元する方法は結構難しいというのも常々思つていて、私自身のような、それこそ阪本是丸先生や藤本先生に色々な発表の機会を戴いて勉強させて貰っている人間が、上手に翻訳というか、一般の神職との間を繋ぐようなことができれば、個々の神職の可能性をもっと引き出せると思います。そうすることによつて、神道教化としてできることがもつと増えると思っています。そこは当然、伊勢神宮のことだけではないと思いますが、先程の神職の役割についての指摘という点では、自分はそのようなことを思っています。

藤本 岡市さんこの辺りでいかがでしょうか。

岡市 皆様から十分な御回答を戴きました。有難うございます。神社本庁を通じて、包括下にある個々の神社で神宮大麻を頒布しておりますので、なぜ、神宮大麻を我々が頒布しなければならぬのかという点で、今、小林先生も仰つていましたが、神職がそういった意識を持つてやつて戴ければいいなと思っております。有難うございました。



札幌（伊勢市御園町高向）

藤本 それでは、そろそろ本日の座談会の纏めに入っていかなければいけません。

実は、座談会を開始する前に櫻井先生の方から、少し資料を画面に共有して見せて戴いたので、興味深いのでぜひ紹介して戴きたいと思いました。

櫻井先生、伊勢の高向の、先ほど、神宮さんの剣先祓を戴いてきて、ムラの入り口や辻々にお供えするんだというお

写真とお話がありました。伊勢信仰の民俗的な部分で、ぜひ最後に紹介して戴ければと思います。どうでしょうか。

櫻井 伊勢に長年おられた八幡さんも懐かしいでしょうか、お話ししておきます。今から写真を画面に共有させて戴きます。

ここにお示している写真は、伊勢市

内の特に伝統的な行事を行っている、御園町高向という集落です。実は、この高向の入り口や辻には、札幌と称してこのような、石棒状の上に屋根をつけて、その下に角形の小さな祠がありますね。この中に神宮から受けてくる万度さんと呼ばれる剣先祓を納め祀っておられるのです。集落の組ごとだったかと思うんですが、担当者が剣祓を受けてきて。

以前伺ったお話では、町内で火事とか何か良くないことがあつたら、この万度さんをお焚き上げて、そしてまた新たに剣先祓を受けてきて、その地域の安全を願って奉斎する。そういう習慣というのは、現代になつても続けられています。納める祠は傷んでくると造り替えています。

このような場所が、集落の中で何か所かあつて、この写真などどこから向こうは村の外、ここから内は村の中というようなところで、しかもこの場合は、近くに御頭神事を行う上でも重要な所となつていて、村の人たちはその場の特性を十分承知されているわけです。

若い人たちはあまり意識せず、気づかれないこともありましようが、こういう形でお伊勢さんのお札を受けてくる慣習は、自分たちの地域の大事な伝統として、あるいは文化として持つておられる。そういうことに気づいて戴けるように、神職さんがその意義を説いて下さればと思います。これを、正しい奉斎の形であるとかないとか、そういう捉え方ではな

くて、こうした民俗的な習慣から伊勢とこのような形で結びついているんですよというような、伊勢信仰を語る一つの材料となってくるというか。

あるいは、まさに信仰の結節点となっているようなものが、私たちは、いろいろな形であるのかもしれない。あるいはあつたかもしれない。そういうものがなかなか分かりにくくなっています。今回の埼玉県神道青年会がなさった調査と書籍の出版は、各地で、規模は大きくなくても、それぞれのお宮でも、こうした取り組みを行って戴くことによつて、もう一度、伊勢神宮と地元神社、地域のつながりを具体的に捉えていけるのではないかと思いますね。

藤本 私も実は、高向の剣先祓の祠のような類似した事象を秋葉講でも見たことがあります。浜松市浜北区といつて、旧三ヶ日町辺りなんですが、旧三ヶ日町の町内でムラの護国神社と忠魂碑の調査をしている時に、道沿いに同じような形で、もう少し大きくて完全な灯籠型のものを見たことがあります。地元の方や河村忠伸権宮司さんに伺うとやはり、その灯籠型のものに秋葉神社の神札を入れるという話で、地元の町内会にて順番に担当して秋葉山本宮秋葉神社から御神札を受けてきて、その御神札を灯籠に入れて年に一回取り替えているんだということです。二月の火祭りあたりか、三月ぐらいになると、秋葉山にお参りしてお札を受けて帰るんだ

けれども、近年はなかなか神札を取り替える時期も遅れたりして、取り替える回数や時期にもこだわらなくなつてきて、秋葉講の継承が難しくなつてきているという話などもお聞きしたことがあります。

こういう高向の事例のようなケースがどのように受け継がれていくかというのも、伊勢信仰のまた別の問題であるかも知れません。先ほど神札の話などもありましたけれども、単純に神宮大麻というお札を配る、配らないということではなくて、地域の中でこういう民俗や伝統が受け継がれていくことがひいては伊勢神宮のお札の頒布や授与のことにもつながつてくると思いますし、伊勢に対する信仰の表れがまた違った形で表出していることかと思ひますので、ぜひ紹介して戴きたいと思ひ、この高向の札場のお話を戴いた次第です。

そろそろ締めに入りたいと思ひますが、最後に、「議論の4方向」ということで、最初の方に話の流れについてお話しした際に示した画像をもう一度共有させて戴きます。一応、1から4までということで、中心にあるもの、神宮の御改正、御師の廃絶から百五十年、それから神宮大麻の頒布の開始から百五十年という、これを基点に置いて時代的に遡り、それから近代からの出発、そして現代と。一方で、地域的な特質や特性、あるいは伊勢信仰の基盤にあるもの、信仰を支えているものは何かということで、奉賛活動に関わるものという

ことでお話を戴きました。ひいては、先ほど岡市さんからも指摘がありましたように、伊勢信仰を語っていく上で、その信仰を支えている、今、現代においてその中軸にあるものはやはり神職です。そういう意味では神宮大麻の奉斎の問題にも関わる部分で神職の役割をどのように考えていくのかということが先ほどの話となった訳です。

最後に、将来の伊勢信仰をめぐるということ、今日の話の感想のようなことでも構いません、お一方、一言二言で結構ですので、今日の話を通じて自身なりに感じたことを少しお話を戴いて、最後に私の方で話をして、終わりにしたいと思います。それでは窪寺さんからお願ひします。

窪寺 令和三年の両宮の参拝者は約三八〇万人を数えました。コロナ禍という状況の中でもお伊勢参りをする方々の存在に、この先も続く伊勢信仰の将来を考える上でのヒントがあるように思います。

また本日お話を戴いた埼玉県の事例でも分かるように、全国各地には過去にそれぞれの地域の人々が培ってきた伊勢信仰というものがあつて、それが少し忘れ去られているなかで歴史的な事実を今一度掘り起こして、また将来の伊勢信仰、神社信仰に結びつけるような動きになればいいのではないかなと思っています。その中心になるのは、先ほど来、先生方が仰っているように地域の神職の方がその結節点となる。神職

がお伊勢さんと各地域の皆さん方とを結びつける役割を果たして戴ければと思っています。

藤本 次に八幡先生、お願い致します。

八幡 先ほども言いましたけれども百五十年というと、明治維新からの戦前期が七十七年、それと戦後の七十七年ということで、ちょうど半々となる時代を戦後、宗教法人として、神社はやってきたんですが、その中で、国家管理時代の伊勢信仰と、戦後の宗教法人の時代の伊勢信仰は同じではないんだらうという感じがしています。

やはり、現代、地域の様々な信仰であるとか、民俗行事であるとか、特に伊勢信仰についていえば、まだ基盤としては存続しているのではないかと感じています。それが伊勢講になったり、いろいろな行事に残っていますので、やはり神職としてはそういうものも残していく、地域の歴史や文化を知って、住民の信仰をサポートしていく中心に伊勢信仰というものを置いてやっていかなければいけないのではないかなと思います。

藤本 それでは、小林先生、お願い致します。

小林 昨年末に神社本庁が配布した冊子に『全国の神社がなぜ神宮大麻を頒布するのか』というものがありません。あの冊子はすごくよく纏まっています、表を見て、すごく勉強になると思いました。

その冊子を拝見した折に戦後のある段階から、神宮さんを直接お参りする方の数と、神宮大麻を受ける方の数、参拝者の方は若干の揺れはあつてもほぼ右肩上がりですが、平成六年をピークに神宮大麻の頒布数は右肩下がりになっていきます。これを見ると、先ほどからお話のあつた、伊勢信仰の形がまさに変わつていくというのは八幡先生の仰る通りで、伊勢信仰の間に神職が、あるいは神宮大麻が介在しない状況になつていくんだらうと思うんです。それを神職が頑張つて、地元の氏神社と神宮大麻の間を取り持つて、伊勢信仰の現代的な形を取り持つような形になれるのか、あるいはもう、個人個人が直接、神宮さんを崇敬していくような形になるのか、それは本当に我々神職自身の努力次第というか。地元の久伊豆神社の氏子区域についていえば、自分の努力次第かなと思つています。

窪寺先生が仰つたように、今後も間違いなく神宮さんの存在は残つていつて、そこを崇敬する、大切に思う人々はずつといふ続けると思うんですが、その形の中に神職が入つていたと私は今、思つております。それゆえ、そのための努力をしていきたいと、今日の座談会を通じて改めて決意をした次第です。

どうも有難うございました。

藤本 小林先生、有難うございます。櫻井先生、最後に一

言お願い致します。

櫻井 私自身が神社の中にいて、実際に御奉仕しているという状況ではないので、簡単に申し上げることはなかなか難しいですが、やはり、お伊勢さんと人々、神宮と国民とを繋ぐ役割として、明治維新の大きな改革の中で、御祓大麻から神宮大麻となつて新たに、皆が等しく神宮の神札を奉斎できる機会が設けられた意義は大きいと思います。この事実をもとに、次世代に継承していくためには、その神宮大麻というものがどういう性格を持つていくのか、あるいは、私たちがそれを奉斎するということがどういう意味を持つのか、そうしたことをどのように捉えていくか。これもやはり時代の中で、社会制度や仕組みがいろいろな形で変化したり、社会意識も異なつていく中では、これだから駄目、これだから良いというだけの選択ではなくて、色々な考え方や理解の仕方が積み重なつて今の私たちの時代に伝わっており、それらを背負つていくという認識も大切かと思ひます。

地域によつては、神宮大麻奉斎の歴史について実はこういう背景があるという理解も大事で、そのことを色々発掘しておくことも必要かなと思つています。その際に一つ貫いていくことは、伊勢の神宮は大神の恒久祭場であつて、何にも勝る至高の神である「大神（おおかみ）の宮」であるという、そういう基本的な理解があると思ひます。機能的な神様では

ないし。そして、その大神の祭場であるのが神宮ということ
が、もちろん皇室とのつながりが基本にあるわけですが、そ
うしたことを忘れずに伝えていくということ、これは重要な
ポイントになっていると思います。

藤本 櫻井先生有難うございました。最後に先生から大事
な点を述べて戴いたと思います。最後に司会の方で纏めてい
かなくてはいいんですが、座談会では「議論の4方向」
ということ、非常に大きな目論見をしてしまいました、
この四つの方向性の問題をわずか数時間で話そうというの
は、非常に難しいことだと改めて実感した次第です。

まず、中世からの伊勢信仰、御師の始まりの話はやはり必
要だろうということで、窪寺先生に重責を担って戴き、近世
のおかげ参りから御師の廃絶辺りは、櫻井先生にお話を戴こ
う。あるいは、民俗のことも含めて八幡先生と櫻井先生でか
つて科学研究費の助成を受けて色々と研究されてきたので、
そのあたりもお話して戴こうと。また、戦後の伊勢神宮の奉
賛のことで最近、論考を書かれている小林先生は、埼玉県
の神道青年会でも伊勢講にかかる調査も担っておられたとい
う経緯からその調査結果などもうまく「伊勢信仰」という一括
りで結びつけることで、座談会として一つ何かできないかと
いう、大きな目論見の下に、私の方で座談会の企画を考えた
訳ですが、大きな目論見であっただけに、なかなか、うまく

纏まりきらないような話になってしまつて、洵に誠に申し訳
ありません。

先ほどから、私を含めた五人で色々と話した通りなんです
が、伊勢信仰というのはこれからも続いていくことは間違
いだと思います。けれども、岡市さんから神職の話が出て
いましたが、神職がこの伊勢信仰に対してどのような結節点と
なっていくのか、なつていけるのか。あるいは、信仰の担
手の立場としてどのように関わっていくのかという問題を今
一度しっかりと位置付けて、今後の伊勢信仰、あるいは神
宮大麻の頒布活動などを考えていく必要があらうかと思
います。

これは、中世以来、御師が発生して以来のテーマだと思
います。中世の頃から、伊勢の神宮への信仰をどう継承して
いくかということで御師が発生してきて、そして時代が下
っていくなかで時の権力者であつた戦国大名も絡んだりしな
がら、あるいは江戸時代になつてからも各地の領主と一定の関
わりを持つてやつてきて。さらには庶民との関わりのなかで
一つの大きな群参の形となつていったのが、おかげ参りであ
りました。そのおかげ参りが一つの伊勢信仰の大きな山とい
うか、担い手としての大きな信仰の山、伊勢参宮の山をつく
たのではないかと考えております。

それが、時代が変わつて明治維新になつて、本日の話のな

かでは、明治五年（一八七二）年まで神宮少宮司を務めて、神宮の御改正に大きく関与した浦田長民の話はなかなか出せなかったんですが、浦田長民が考えていたことの一つは何かというと、国民皆が、お伊勢さん、天照大神をきちんとお祭りをして、神宮を国民教化の中心に据えていくという側面を持っていたと思うんです。その形がまさに神宮大麻の全国頒布であったわけです。先ほど、八幡先生からの、戦前の国家神道の時代と戦後の宗教法人になってからの部分は違うという指摘もありましたが、そういう側面はもちろんあるとは思いますが、その一方で神宮大麻というものに関しても、伊勢信仰としての連動性、継続性があり、これもある意味担い手としては、一つの大きな信仰の山をつくってきたのではないかと。

今までの神宮大麻の頒布の形というものを百五十年のスパンで考えていきますと、もちろん戦前には千三百万体の頒布数という信仰が大きく表出する山があつて、頒布されていた数値としてはまさに頂点にいくわけですが、戦後、その頒布が断絶せずに色々な意味で、神社の神職や総代らによつて新しい伊勢信仰の形を築いてきて、平成六年に約九百三十万体制となりました。これも一つの大きな信仰の山、信仰の頂点です。そこから、頒布数は緩やかな下りを迎えてまた一つ違った形で、今現在、ちょうど一つの岐路を迎えているというのか、伊勢信仰の新たな形という点において言えば、江戸時代まで

築き上げてきた御師の方たち、それから戦前の、いわゆる明治維新以降、旧御師や神宮教院、神宮奉斎会、神社本庁、氏神神社の神職らによつて築き上げてきた信仰の山から、今、ある意味また一つの違った時代、違った信仰の山登りに入ってきているのかなという感覚があります。いわゆる最近流行りの言葉でいえば、「フェーズ」が違つてきたと言つたら何ですけれども、そういう意味での一つの時期区分、フェーズのような形としてみれば、これからはまさに伊勢信仰の新しい時代、新たな変化を迎える時期に突入してきているのかなと考えています。

窪寺先生が先ほど仰つておられたように、新型コロナウイルスの感染拡大といういわゆるコロナ禍になつて、今こうやつてリモート形式で座談会をやつていますが、こうした形も座談会一つとつてみても新たな形式な訳ですので、改めて考えますと伊勢信仰の形の在り方を含めて、あるいは神職の関わり方も含めて、様々な意味、様々な点で現代は、伊勢信仰の一つの大きな岐路に立たされている、信仰の在り方の岐路に立たされているのかなと考えさせられました。

先程、櫻井先生のほうから、伊勢市御園村の高向の、剣祓を入れる灯籠型の祠の話をして戴きましたが、高向は、高向大社の御頭神事という獅子頭が出る国の重要無形民俗文化財に指定されているようなお祭りを持つている地域なんです

が、そのお祭りの在り方でも、今までは縁側があるような家が待屋と呼ばれる家になって、御頭と呼ばれる獅子頭の滞在場所となってお祭りをやっていたものが、今は住居の形が変わっていて、今まで通りのようなお祭りのやり方ができなくなってきたんだよという話を十四、五年前ぐらいに櫻井先生からお聞きしたことがあります。

ちょうど年末でしたが、私が宮城県の鹽竈神社に伺う機会があり、その際に同社の野口権宮司さんと懇談していた際にその高向大社の御頭行事の変化の話をしたら、「いやいや藤本さん、次の社報『鹽竈さま』の巻頭言にちょうど新築住宅と縁側について書く予定なんだけれども、神宮大麻の頒布活動にしても実は同じ状況なんですよ」と仰っていました。なぜ、このような話をするかと申しますと、実は住居の形式が、近年、いわゆる昭和までの日本型の住居ではなくなってきているんですね。いわゆる縁側があつて廊下があつて客間があるような部屋はなくて、玄関の扉も引き戸ではなくて、大半がドアタイプのもので、玄関や縁側で茶飲み話を近所の人たちがしているような、そういう光景の家は田舎でもあまりありません。野口権宮司さんも仰っておられましたが、宮城県の塩竈市という海辺の地方都市であっても、比較的新しく建てられた住居は、みな玄関は引き戸でなくドアで、部屋の窓も縁側があるような窓ではなくて、窓を開ければ、客

間などではなく、マンションのような即部屋の中という形の家ばかりです。いわゆる人と人との暮らしや祭礼などの慣習、人と人とのコミュニケーションを支えるバッファというのか、緩衝帯、中間領域になるような場所、空間がない。そういう中においては、神宮大麻の頒布も今までのように、「こんなにちは」と言つて玄関の引き戸をガラガラと開けて、土間で「今年も宜しく頼みます」みたいな話ではできません。逆に、地域の住民が、ひと月かけて頒布のために街中を歩いている神主さんの姿、格好を見て、ヤクルトの販売員さんではないですが、お札配りをしているからということ、その場で神職さんに申し出て神札を受けて帰る、あるいは「何日の何時に家にいるからその時に来てね」と頼んで約束するような、そういう姿が変わってきているという話を伺いました。

今は、やはり、住居の玄関はドアの世界で、引き戸の世界だと、土間があつて、そこに入つてちよつと話をしながら、「神宮のお札を受けてくれないか」みたいな話ができるんですが、今はドアの世界なので、ドアを開けるか、開けないか。ドアを閉めたままで居留守をされたら、話すらできませんし、頒布活動そのものが全くできないわけです。もし少し開けてくれても、すぐにボタンと閉められたら、それでおしまいです。そういう意味ではドアを開けるか、開けないか、つまりアナログでなくデジタル、0か1かみたいな極めてドライな世界

であるんですよという話を権宮司さんからお伺いしました。

権宮司さんからは、先程少し述べたようにこの時期は一定期間、お札配りのために日中に装束を着て塩竈市内を歩いていることによって「うちにも来てくれ」とか、「何時まで回っているの」「明日は回らないの」「明日だったら何時頃にこの辺を回ってきてくれ」というような話をしてくれる人々が結構多いので、現状はまだ有難い状況だけれども、実際には、個別に一軒一軒のお宅を回って頒布がやれるような時代では、だんだんなくなってきているんだよというお話でした。

そういう意味での神宮大麻頒布の在り方というのも、お札を受ける側の問題について考える必要性もあるんじゃないかと思っています。住居の形も今、私たちの住んでいる住居そのものも、一戸建ての建物を考えてみれば、確かに引き戸の玄関であるお宅は少なくなってきていて、地方に行っても実際には住宅事情とともに変化してきています。そういう意味では、伊勢信仰の在り方、神宮大麻頒布の在り方も一つの岐路に立たされている時代なんだということを改めて考えさせられた次第です。

今日のこの座談会を通じて、まさに先ほど八幡先生が仰っていたように、戦前の七十七年、戦後の七十七年、これは小林先生の埼玉の伊勢講の話の中にも出てまいりましたが、まさに時代の変わり目というのか、そういう時期にこの座談会

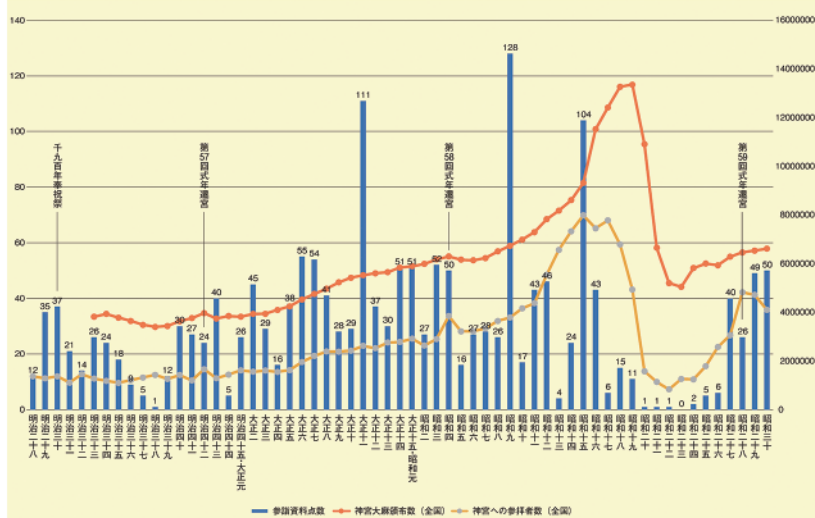
をセッティングできたのは、また新たに今後の神社界が考えていくべき課題、問題の一つとして、本宗として仰ぐ伊勢神宮への信仰、神宮大麻の頒布があるんだということを改めて感じさせて戴いた次第です。

伊勢信仰を考えることは、神道文化を考える上でも非常に大きな問題、テーマの一つであります。そういった意味では、私も含めてですけど、それぞれのお立場で引き続き、この問題を探っていく、あるいは信仰の結節点を、多面的に見ていく在り方というのはぜひ続けていかなければならないし、続けて戴きたいと思っています。

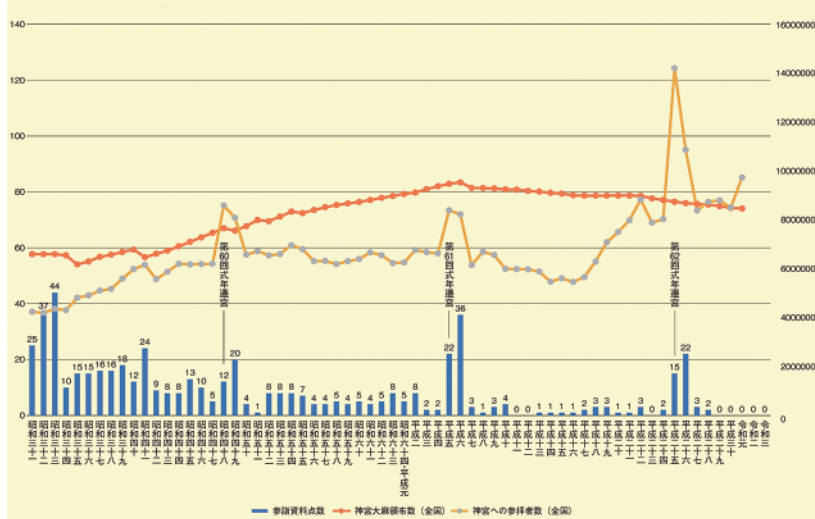
時間も参りましたので、これで座談会の方を閉じたいと思います。本日は、このような不慣れなりモート形式ではありましたが、各先生から伊勢信仰にかかる貴重なお話を戴きまして、洵に有難うございました。

調査報告 年代別参詣資料

埼玉県内参詣資料の点数(明治後期から昭和前期)と神宮大麻頒布数・参拝者数(全国)比較



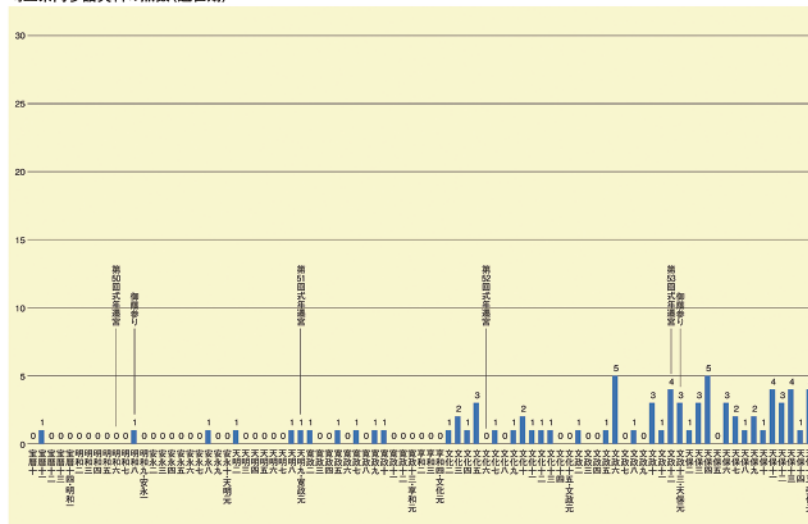
埼玉県内参詣資料の点数(昭和後期から)と神宮大麻頒布数・参拝者数(全国)比較



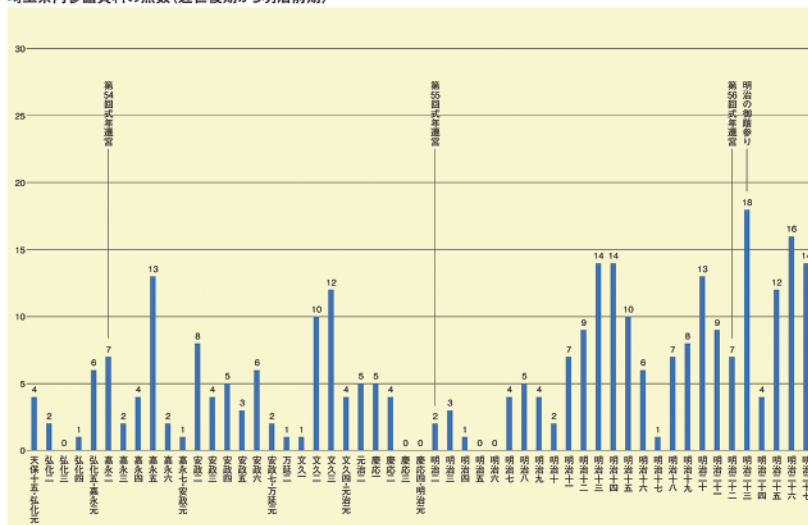
埼玉県内の参詣資料の点数と神宮大麻頒布数・参拝者数との比較(『埼玉県の伊勢講』所収)

グラフ1、年代別参詣資料

埼玉県内参詣資料の点数(近世期)



埼玉県内参詣資料の点数(近世後期から明治前期)



- 参詣資料の①参拝年月日をもとに作成した。但し、一つの資料で複数回参詣しているものは最初の年月日を採用した。
- ①の参拝年月日が不明で②建立年月日が分かるものは、そちらを採用した。
- 参詣大願頒布数(全国)については、『全国の神社がなぜ参詣大願を頒布するのか』(神社本庁、令和3(2021)年)を参照した。
- 参詣への参詣者数は、上記『全国の神社がなぜ参詣大願を頒布するのか』の内宮外宮参詣者数の合計を参照した。

埼玉県内の参詣資料の点数一覧(『埼玉県の伊勢講』所収)